岩手県埋文センター文化財調査報告書第79集

小森林館跡発掘調査報告書

国道4号石鳥谷バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター

建設省岩手工事事務所

小森林館跡発掘調査報告書

国道４号石鳥谷バイパス関連遺跡発掘調査

序

四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって地域開発の基幹となる道路など、交通網整備事業は県政の重点施策でもあります。

一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。貴重な文化財の保護、保存と現代生活をより豊かにという開発との均衡を保つことも大きな課題であります。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年発足以来、県教育委員会の指導と調整のもとに、止むを得ず開発によって消滅する遺跡について発掘調査を行いその記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道４号改築工事（石鳥谷バイパス）に関連して昭和57年度に発掘調査した石鳥谷町小森林館遺跡の調査結果をまとめたものであります。

調査範囲は、現国道の両側を拡幅する狭い範囲に限られておりましたが、中世における地方有力者であった小森林氏の居館に伴う掘立柱建物や溝、などの発見と共に、縄文時代、平安時代の遺構、遺物が重複して存在しているなど、小森林館遺跡の内容や時期、性格を知る上での手掛りとなる資料の提示ができたといえましょう。

この報告書が研究者のみならず一般の方々にも活用され埋蔵文化財保護思想普及の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご協力、ご援助賜わりました建設省岩手工事事務所、石鳥谷町教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝申し上げると共に、今後のご指導をお願いいたします。

昭和59年１月

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター

理事長　金　子　彰　吉

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	金子彰吉	（県教育長）
副理事長	柴内　眞	（県教育次長）
常務理事	熊谷正男	（県立埋蔵文化財センター所長）
理事	吉田良和	（県農政部次長）
〃	高橋健之	（県林業水産部次長）
〃	穂積昭慈	（県土木部次長）
〃	板橋　源	（県立博物館長）
〃	草間俊一	（県立盛岡短期大学長）
〃	小形信夫	（元常務理事）
監事	佐藤公志	（県教委総務課長）
〃	小原吉雄	（県教委財務課長）

職員

所長	熊谷正男
副所長	鈴木信吉
〔総務課〕	
総務課長	菊池　勉
庶務係長	阿部詔夫
主事	佐藤久四郎
〃	戸草内幸男
〃	立花多加志
技能員	佐藤春男
〔調査課〕	
調査課長	嶋　千秋
主任専門調査員	近藤宗光
〃	国生　尚
専門調査員	朝野孝二
〃	菊池利和
〃	鈴木恵治
〃	渡辺洋一
〃	大原一則
〃	田鎮寿夫
〃	佐々木嘉直
専門調査員	栃沢満郎
〃	田村壮一
〃	岩渕　久
〃	光井文行
〃	玉川英喜
〃	石川長喜
〃	工藤利幸
〃	中川重紀
〃	高橋与右エ門
〃	高橋義介
〃	佐々木清文
〃	酒井宗孝
〔資料課〕	
資料課長（兼）	鈴木信吉
主任専門調査員	昆野　靖
専門調査員	平井　進
〃	鈴木隆英
〃	三浦謙一

例　　言

1．本報告書は岩手県稗貫郡石鳥谷町字小森林地内に所在する小森林館跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．調査は国道４号石鳥谷バイパス建設に伴う緊急事前調査である。事業主体である建設省岩手工事事務所から委託を受けて(財)岩手県埋蔵文化財センターが調査したものである。

3．発掘調査は昭和57年９月１日から10月14日まで行ない、整理まとめの作業は昭和58年３月まで行なった。

4．発掘調査面積は1,100㎡である。(調査対象面積は1,700㎡)

5．調査には近藤宗光、酒井宗孝があたった。

6．検出された遺構と遺物は次のとおりである。

平安時代竪穴住居址　１棟　　掘立柱建物跡　１棟　　柱穴群

溝跡　１条　　ピット　４基

縄文式土器　　土師器　　須恵器　　石器　　銭貨　　その他

7．石器の材質鑑定は岩手県立大船渡農業高等学校教諭佐藤二郎氏に依頼した。

8．本報告書の執筆分担は次のとおりである。

調査に至る経過……嶋　千秋

遺跡の環境２～４、遺構分……近藤宗光

遺跡の環境１、遺物分……酒井宗孝

9．調査の方法は次のとおりである。

(1)　調査区の設定と遺構名

調査区域内における国道４号の西側の境界杭の２本（第４図のⒶ、Ⓑ）を直線で結び、この直線と並行に東５ｍの位置に中心線を設定した。(この中心線は国道４号上になる)

また、境界杭Ⓐを通り、中心線に直交する直線を設定し、基準線とした。中心線、基準線はそれぞれその交点を基点として20ｍ毎に区切り、中心線は北からＡ、Ｂ、……Ｋとした。基準線はＫラインとなる。基準線の中心線から西がⅠ、東がⅡである。中心線はⅡラインとなる。

これによって設定された20ｍ×20ｍの大区画の呼称は、その北西隅の名称により、ＡⅠ区、ＢⅡ区などとした。遺構が検出された大区画には、２ｍ間隔10等分の小区画を設け、北から南へａ、ｂ、……ｊ、西から東へ０、１、２、……９とした。この小区画２ｍ×２ｍの呼称は、ＡⅠａ０、ＢⅡｃ２などとなる。中心線は磁北に対し21°31′東偏している。

検出された遺構の名称は、その遺構が発見された小区画名に遺構の種別を付して表わした。

(2) 粗掘・精査

任意の数個所を２ｍ×２ｍの範囲で試掘して、遺構の検出面を把握した後、各地区毎に表土除去、粗掘・検出を行なった。検出面は把握し難く、更に一段掘り下げて検出した所もある。遺構が検出された地区はＤ～ＧのＩ区であり、精査を行なったのはその地区である。

(3) 記録

遺構の平面図、断面図は20分の１の縮尺で作成した。断面図については省略したものもある。調査地域の地形は100分の１で平板測量した。

10．整理・まとめ作業については次のとおりである。

(1) 遺構配置図

野外調査時に作成した平面図を基に100分の１の縮尺図を作成し、第４図として200分の１の縮尺図を掲げた。

(2) 各遺構図

野外調査時に作成した図をトレースし、それにスケールを付して、住居址とピットは40分の１、土層断面図は80分の１、その他は60分の１で表わした。ピットの埋土断面は省略してある。図中の記号は、Ｇ＝礫、Ｐ＝土器、P_1、P_2……P_n＝柱穴である。

(3) 出土遺物図

土器類は３分の１、石器類は２分の１で掲げてある。

11．発掘調査にあたって、石鳥谷町教育委員会、建設省岩手工事事務所の御協力を賜わった。

12．野外調査においては、高橋賢司氏他地元作業員多数の協力を得た。

室内整理作業においては、当センター室内作業員多数の協力を得た。

目　　次

序

例言

Ⅰ．調査に至る経過 …… 9

Ⅱ．遺跡の環境 …… 9

1．地形・地質 …… 9

2．周辺の遺跡 …… 11

3．周辺の城館 …… 12

（第1表　石鳥谷町内の城館跡）

4．小森林館 …… 13

Ⅲ．検出された遺構と遺物 …… 16

1．竪穴住居址 …… 16

2．掘立柱建物跡 …… 17

3．柱穴群 …… 20

（第2表　GId4柱穴群・柱穴一覧表）

4．溝 …… 22

5．ピット …… 22

6．館南端部 …… 24

7．遺構外からの出土遺物 …… 26

Ⅳ．まとめ …… 29

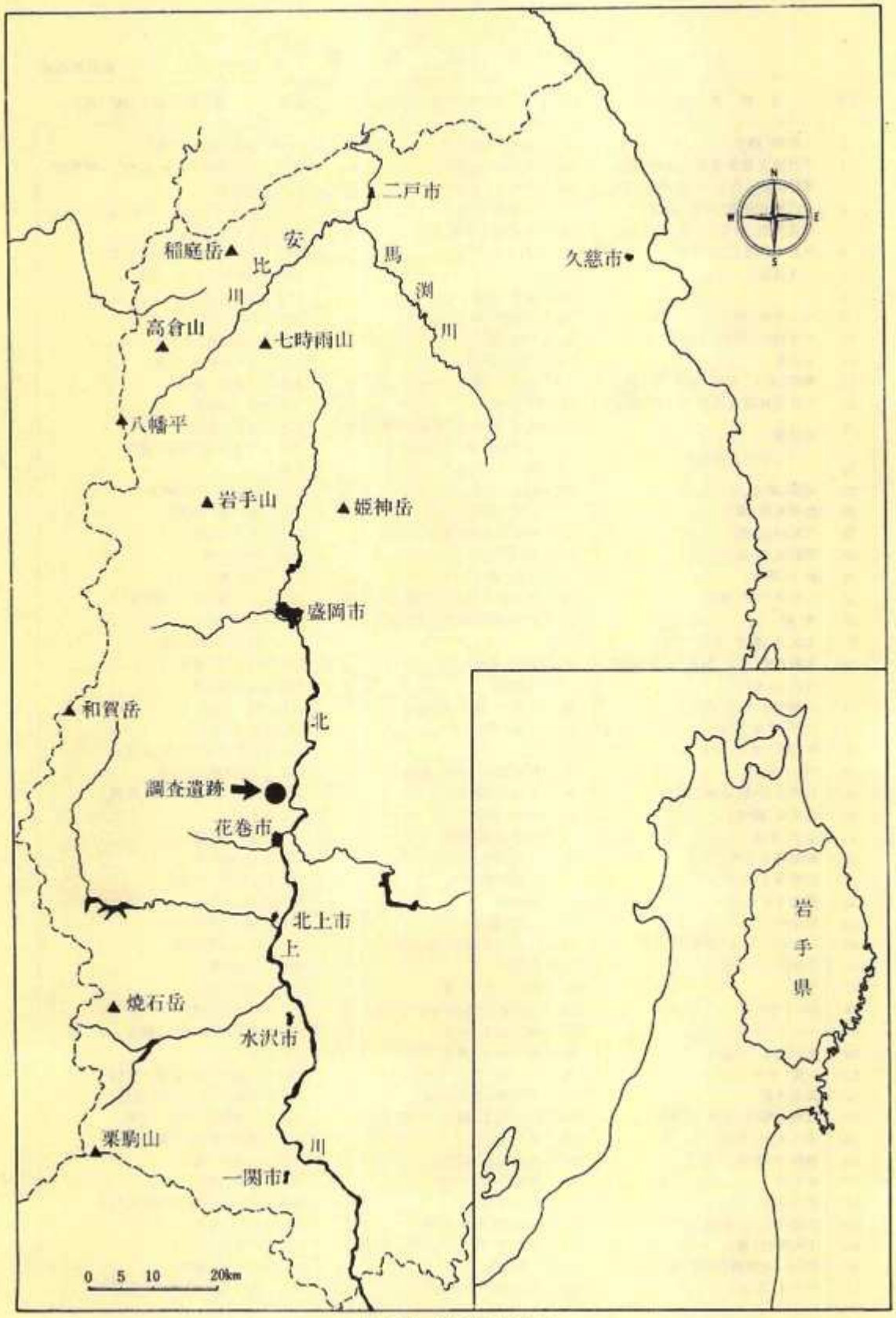
（第3表　石器計測表）…… 31

図版目次

第1図　岩手県全体図 …… 1
第2図　遺跡分布図 …… 3
第3図　小森林館地形図 …… 5
第4図　遺構配置図 …… 7
第5図　土層断面柱状図 …… 11
第6図　DIc5住居址 …… 16
第7図　EI～FI南北・東西断面図 …… 18
第8図　EIh5建物跡 …… 19
第9図　GId4柱穴群 …… 21
第10図　EIj4溝 …… 23
第11図　ピット
　GIiライン東西断面図 …… 25
第12図　DIc5住居址
　遺構外出土遺物(CIh5グリット)‥ 33
第13図　遺構外出土遺物(EII・FII粗掘) …… 34
第14図　〃　(EI・EII・FII粗掘) …… 35
第15図　〃　(EII・FII粗掘) …… 36
第16図　〃　(EI・FI粗掘) …… 37
第17図　〃　(GI・EII・FII粗掘) …… 38
第18図　EIj4溝
　遺構外出土遺物(EII・FII粗掘) …… 39
第19図　遺構外出土遺物(EII・FII粗掘) …… 40
第20図　EIj4溝
　遺構外出土遺物(EII・FII粗掘) …… 41
第21図　遺構外出土遺物(EII・FII粗掘) …… 42
第22図　〃　(EII・FII粗掘) …… 43

写真図版目次

1．小森林館全景 …… 47
2．小森林館調査区域 …… 48
3．小森林館堀・土塁 …… 49
4．DIc5住居址 …… 50
5．EIh5建物跡
　GId4柱穴群 …… 51
6．GId4柱穴群 …… 52
7．EIj4溝 …… 53
8．ピット …… 54
9．GI、FI、CI、EII、FII区状況 …… 55
10．出土遺物（土器） …… 56
11．出土遺物（土器） …… 57
12．出土遺物（土器） …… 58
13．出土遺物（土器） …… 59
14．出土遺物（土器・石器） …… 60
15．出土遺物（石器） …… 61
16．出土遺物（石器） …… 62
17．出土遺物（石器） …… 63
18．出土遺物（石器・土器片） …… 64

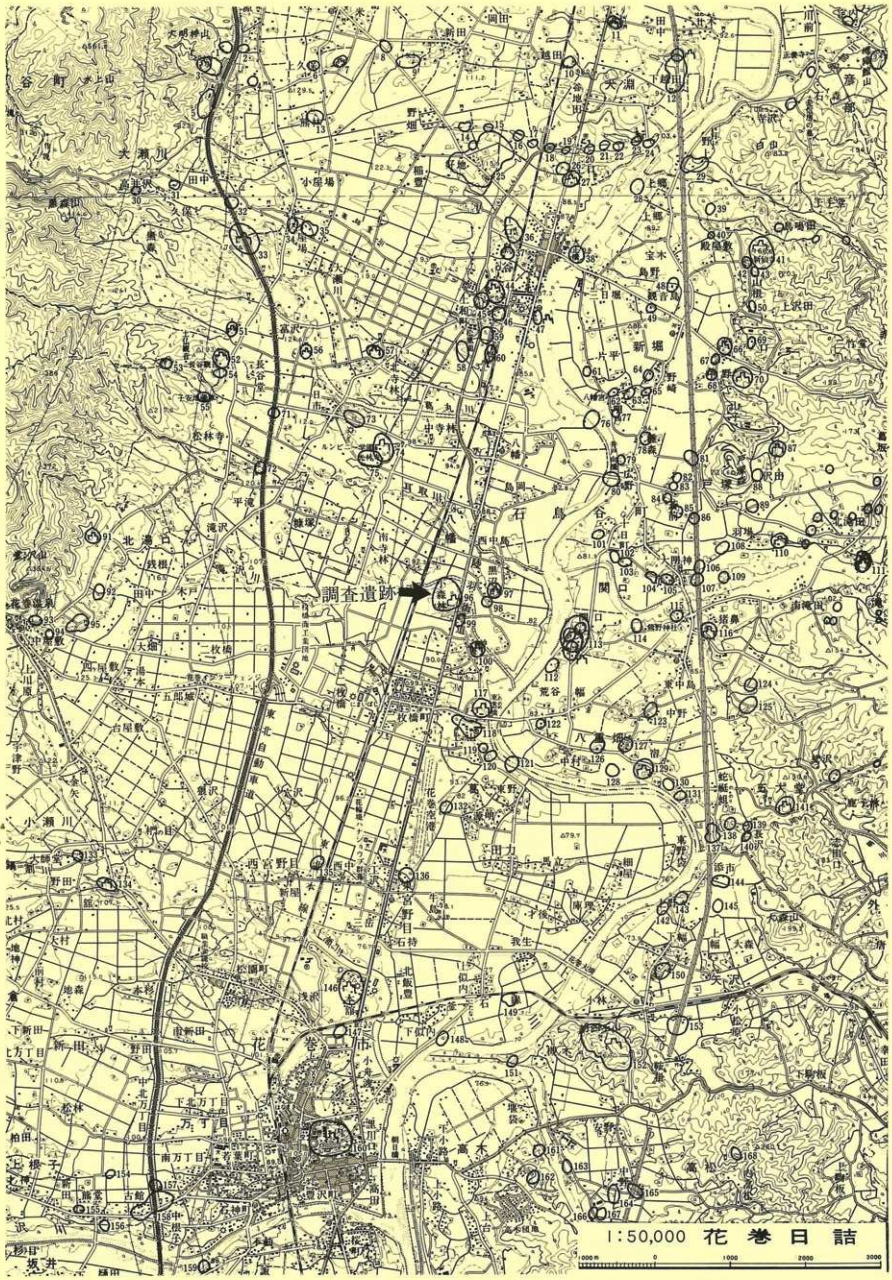

二戸市
久慈市
稲庭岳
安
比
川
馬
渕
川
高倉山
七時雨山
八幡平
岩手山
姫神岳
盛岡市
和賀岳
北
調査遺跡
花巻市
北上市
上
焼石岳
水沢市
栗駒山
川
一関市
0 5 10 20km
岩
手
県

第１図　岩手県全体図

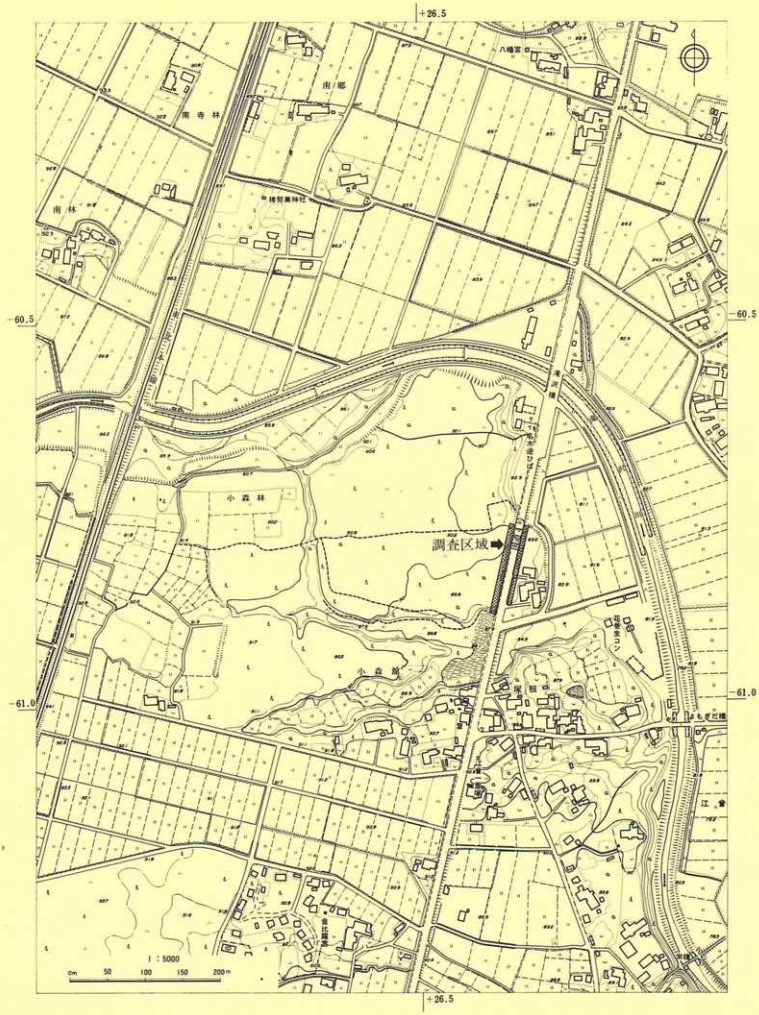
遺　跡　地　名　表

※調査遺跡

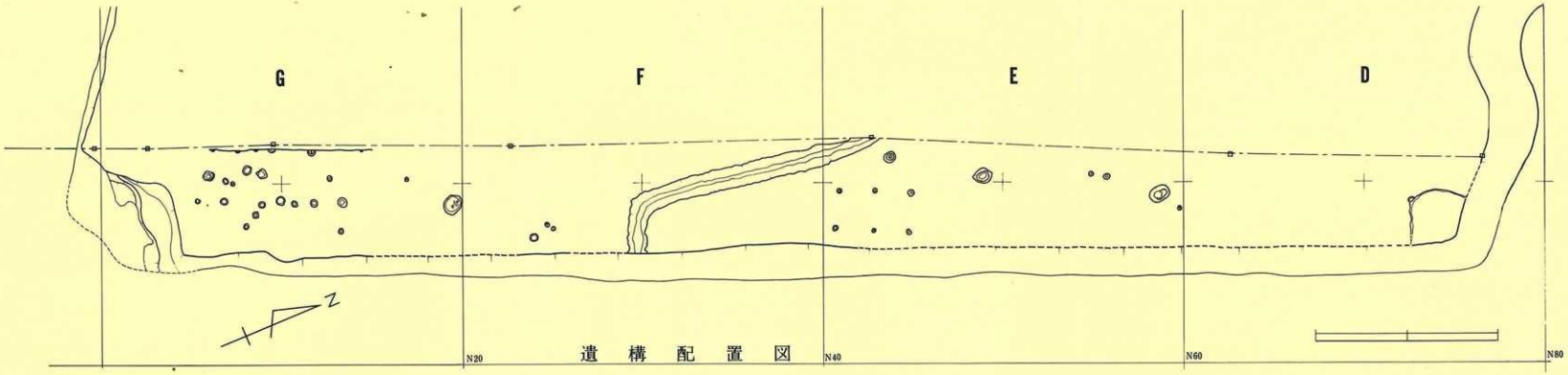
番号	遺跡名（時代）	番号	遺跡名（時代）	番号	遺跡名（時代）
1	大明神（縄文）	62	明戸II（縄文）	115	猪鼻（縄文、平安）
2	片寄漆立縄文遺物包含地（縄文）	63	明戸III（平安）	116	広済館跡（中世、近代）＝猪鼻館
3	墳館（縄文、弥生、平安、中世、近代）	64	久保II（平安）	117	江曽館
4	十二神古墳群（中世、近代）	65	久保III（平安）	118	佐渡川古墳群（中世、近代）
5	御在所III（縄文、中世、近代）	66	侍従館＝中館	119	方八丁（平安）
6	片寄上久保柱群（平安）	67	保沢川（平安）	120	上ノ山（縄文、平安）
7	上久保館	68		121	鵜船場（中世、近代）
8		69	塚原（平安）	122	大西（縄文）
9	四ツ屋IV（縄文）	70	下館跡（中世、近代）	123	新田（縄文）
10	片寄越田（縄文、平安）	71	野田（平安）	124	反町（縄文）
11	金田館	72	上台（平安）	125	反町（中世、近代）
12	西田（縄文、平安、中世、近代）	73	八日市（縄文、平安）	126	大西橋（縄文）
13	片寄熊林縄文遺物包含地（縄文）	74	寺林城	127	宿I（縄文）
14	村墳塚	75	光林寺（縄文、平安、中世、近代）	128	宿II（縄文）
～	（中世、近代）	76	赤川渡し場（中世、近代）	129	八重畑館（中世、近代）
24		77	関口V（平安）	130	
25	焼場（縄文、平安）	78	種森（平安）	131	ジャノメリ（縄文）
26	数馬屋敷（縄文）	79	広野（縄文）	132	山の神（縄文）
27	古館（好地館）	80	井戸向船場（中世、近代）	133	太子堂（縄文）
28	墳船場（中世、近代）	81	福（平安）	134	小瀬川館
29	野上（縄文）	82	板屋（縄文、平安）	135	西宮野目（縄文）
30	弥五郎屋敷（縄文）	83	野沢川I（縄文、平安）	136	十三塚（中世、近代）
31	渡（縄文）	84	野沢川II（縄文、平安）	137	高畑（縄文）
32	大地渡（縄文、平安）	85		138	安堵屋敷（縄文）
33	大瀬川館（縄文、弥生、平安、中世、近代）＝館山	86	大曲（縄文）	139	長沢II（縄文）
		87	赤間館	140	長沢IV（縄文）
34	大瀬川小学校（縄文）	88	志登計（縄文、平安）	141	隅っこ館
35	田屋（中世、近代）	89	戸塚（平安）	142	古堂（平安）
36	熊野堂（縄文、平安）	90	欠	143	漆市館跡（中世、近代）
37	馬頭（平安）	91	銭根館跡（中世、近世）	144	漆市（縄文、弥生）
38	石鳥谷船場（中世、近代）	92	北湯口（縄文）	145	漆市古墳群（中世、近代）
39	太田IV（縄文）	93	山本（縄文）	146	本館
40	宝木（平安）	94	花巻温泉（縄文）	147	塚ノ森（縄文）
41	新堀館＝上館	95	白山長根（縄文）	148	下似内（平安）
42	長善寺I（平安）	96	小森林館 ※	149	上似内（平安）
43	長善寺II（平安）	97	黒沼館	150	下中（平安）
44	備中館	98	江曽（縄文）	151	槻ノ木（平安）
45	好地田一里塚（中世、近代）	99	江曽一里塚（中世、近代）	152	胡四王山館跡
46	上和町I（平安）	100	柳館	153	八幡（縄文）
47	小館	101	上十日市（平安）	154	谷地（平安）
48	鳥（平安）	102	七日市古墳群（中世、近代）	155	熊堂古墳群（古代、奈良）
49	沼の欠（平安）	103	塚ノ森I（平安）	156	魔王塚（中世、近代）
50	上沢田I（平安）	104	塚ノ森II（縄文、平安）	157	万丁目（？）
51	芳館（中世、近代）	105	七ッ森（縄文、平安）	158	古館（平安、中世、近代）
52	長谷堂館	106	大明神（縄文、平安）	159	下館（平安、中世、近代）
53	大興寺館跡（中世、近世）	107	貝ノ渕I（縄文、平安）	160	花巻城跡（中世、近世）
54	米斗利沢（平安）	108	滝沢（平安）	161	塚袋（縄文、平安）
55	南勝寺（中世、近代）	109	貝ノ渕II（縄文）	162	久田野（縄文）
56	富沢館	110	笠原館	163	安野（縄文）
57	北寺林館	111	大川原館	164	中野一里塚（中世、近代）
58	白幡林古墳（中世、近代）	112	関口III（中世、近代）	165	高松（縄文）
59	上和町II（縄文、平安）	113	関口V（縄文、中世、近代）＝関口館	166	中野B（縄文）
60	北向い古墳群（中世、近代）			167	中野A（縄文）
61	明戸I（平安）	114	関口西（中世、近代）	168	高松山経塚（中世、近代）



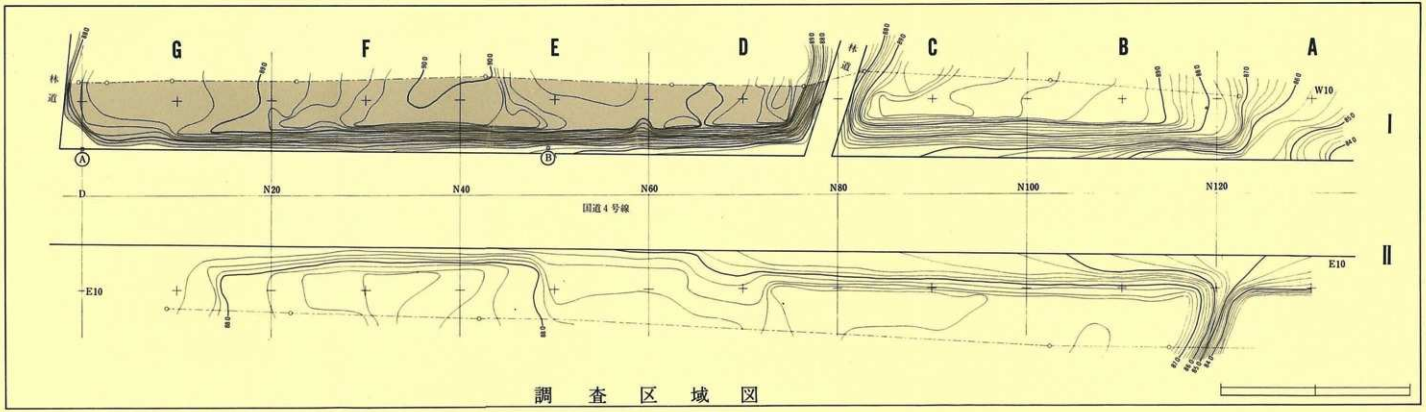
第2図　遺跡分布図


+26.5
八幡宮
南ノ郷
南寺林
南林
甲神宮神社
-60.5
-60.5
小森林
調査区域
小森館
-61.0
-61.0
もぐら橋
江
金江橋
1：5000
0m 50 100 150 200m
+26.5

第３図　小森林館地形図



上掲遺構配置図分



第4図　遺構配置図

Ⅰ．調査に至る経過

一般国道４号改築工事（石鳥谷バイパス）にかかわる埋蔵文化財のとり扱いについて工事計画実施の見通しが具体化された昭和55年に建設省岩手工事事務所と県教育委員会事務局文化課との間で協議がもたれた。

本報告書に関係する石鳥谷町所在小森林館は、周知された遺跡であり、古くから文献資料にも記載されており、東西300ｍ南北400ｍほどの規模と思われ南と北に郭を有し土塁や堀等も現存してる。国道４号はこの館を南北に縦貫し分断している。今回の改築工事は、距離140ｍにわたって国道を中心に東、西それぞれ約７ｍ拡幅する内容となっており調査対象面積は1,700㎡となった。

発掘調査は当埋文センターが岩手工事事務所から委託をうけ、昭和57年９月から２ヶ月の予定で実施することになった。

なお、調査範囲における巾が狭いことから特に国道西側における掘削土の処理や調査詰所設置場所の確保に苦慮したが奥山　清氏（花巻市在住）の所有地を借りることになり作業能率をあげることができた。

交通量の頻繁な国道の両側の調査であるため、安全管理には十分な配慮のもとに実施することにした。

Ⅱ．遺跡の環境

１．地形・地質

岩手県北部にその源を発し、宮城県石巻港に注ぐ北上川は、本流延長249㎞、流域面積10,250㎢に及ぶ東北有数の大河である。この流域は、盛岡以北を上流、盛岡～前沢間を中流、前沢以南を下流と３つに区分される。また中流域も花巻以北・花巻～金ヶ崎間・金ヶ崎以南の３区に細分されている。北上川の西沿と東沿では、その地形構造を大きく異にする。西沿では奥羽脊梁山脈から流れ出す支流によって形成された大小の扇状地が発達するのに対し、東沿では、北上山地に続く丘陵部縁辺に小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。

小森林館跡の所在する石鳥谷町は、北上中流域北部（花巻以北）に位置する。遺跡は、北上川西沿に発達する段丘化された扇状地の末端部分に載っており、東には北上山地の最高峰早池峰山の美景が望まれる。

花巻以北に発達する段丘は、中川ら（1963）によって、上位より石鳥谷段丘、二枚橋段丘、

花巻段丘、都南段丘に区分されている。

石鳥谷段丘（高位段丘）　日詰付近から石鳥谷付近にかけて残片的に分布する。段丘面は開析が進んでいるが傾斜は比較的緩やかである。礫を主体とする３ｍ以上の構成層の上に、１ｍ内外の火山灰質層を載せる。

二枚橋段丘（中位段丘）　日詰付近以南に発達し、石鳥谷段丘にともなって分布する。６ｍの礫層の上に砂および灰白色粘土が載り、薄い火山灰層におおわれる。二枚橋駅付近を模式地とし、この礫層を二枚橋礫層と呼ぶ。礫層中には粘土層や泥炭層がはさまれる。小森林館は、この二枚橋段丘の縁辺部に載っている。

花巻段丘（低位段丘）　石鳥谷段丘、二枚橋段丘より急傾斜で新鮮な段丘面をもち、複合扇状地状を呈する。中流域北部では、上記の２つの段丘を取りかこむ形で、最も広範囲に分布している。

都南段丘（低位段丘）　花巻段丘の外縁部に発達し、北に進むほど下位の沖積面との段丘崖は不明瞭なものとなっている。礫および砂から成る構成層をもつ。

調査区域西側に深堀りを入れ、基本層序とした（第５図）。なお、東側にも深堀りを入れたが、この部分は後世の攪乱を多く受けており図化はしなかった。

Ⅰ層・黒褐色土、表土で腐葉土が主体をなす。（層厚７～12cm）

Ⅱ層・褐色土、国道４号建設の際の廃土の盛土であると考えられる。下位のⅣ層・Ⅴ層からなる。（層厚18～100cm）

Ⅲ層・灰褐色土、東に進むにしたがって層厚が厚くなるようである。（層厚７～14cm）

Ⅳ層・シルト層、ａ～ｃの３層に細分される。ａ層は肌理が細かく、一部粘土質のものも含まれる。ｂ・ｃ層では砂が多くなり、ｃ層では小礫を含む。（層厚80～85cm）

Ⅴ層・砂礫層である。この段丘の構成礫層の一部と考えられる。（層厚60～70cm）

Ⅵ層・浅黄色土（粘土質土層）・礫層中に含まれる粘土質土層と考えられるが、詳細は不明である。（層厚不明）

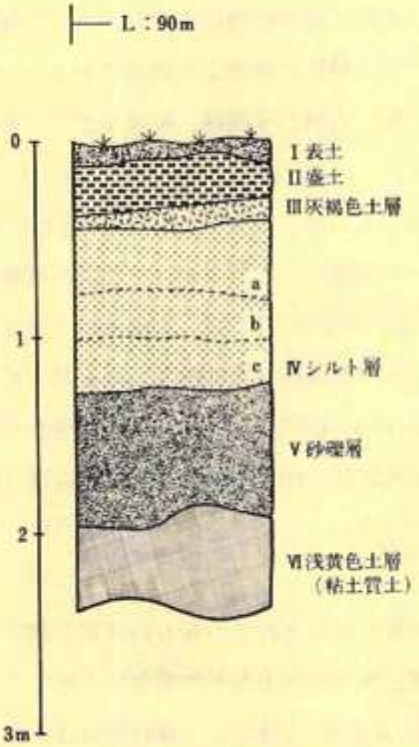
〈参考文献〉

中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森由紀子・木下　尚・竹内貞子・石田琢二（1963）：北上川中流沿岸の第四系および地形（２），地学雑誌第69巻第811号。

中川久夫（1981）：第四系，北上川流域地質図説明書，長谷地質調査事務所。

光井文行（1981）：地形・地質，稲村遺跡・中田遺跡・古屋敷遺跡，岩手県埋文センター文化財調査報告書第19集。

高橋文夫（1979）：地形・地質，湯沢遺跡，岩手県埋文センター文化財調査報告書第２集。



第５図　土層断面柱状図

２．周辺の遺跡

岩手県教育委員会がまとめた岩手県遺跡基本図（1980年）によれば、本遺跡周辺で確認された周知の遺跡は第２図に示すとおりである。これらの遺跡の中には東北新幹線建設や東北縦貫自動車道建設などの大型開発をはじめ種々の開発事業に関連して発見されたものも多く、それらの開発行為に依った分布のしかたを示している部分が見える。今後更に遺跡が発見され、その数が増えていくのは当然であり、遺跡分布の状況がどう変化していくか予測のできないところであるが、現在の分布の状態からいえば、次のようにまとめることもできよう。

縄文時代の遺跡は、北上川西岸では、奥羽山脈に連なる山々の山麓部分に多く見られる。この部分は石鳥谷段丘と呼ばれる高位段丘で、この段丘は石鳥谷市街の北側にも広がり、ここにも遺跡が見られる。また中位段丘の二枚橋段丘縁にも発見されている。現在水田として利用されている下位の花巻段丘にもこの時代の遺跡が発見されてはいるが、その数は少ない。北上川東岸では、北上山地の西麓に多くの遺跡が発見されており、更に比較的低地の北上川沿いの段丘縁にも見出される。また北上川支流に沿った段丘縁にも多く見られる。

弥生時代の遺跡は少ない。西部山麓部に１箇所確認されている他、北上川沿いの低地に数箇所見られる程度である。

古墳・奈良時代の遺跡は花巻市熊ノ堂古墳が確認されている程度である。

平安時代の遺跡は、川沿いの段丘縁や低地に占地しており、縄文時代の遺跡に複合しているものが比較的多いが、一般に縄文時代の遺跡より低地にあるといえる。

中・近世の遺跡は、館跡、塚、古墳、寺院跡、船場などで、その性格上段丘縁や独立丘陵、そして北上川沿いに見られる。

石鳥谷町内で発掘調査されたものは、五大堂長沢遺跡(縄文晩期、1949、吉田義昭)、大瀬川田屋遺跡（縄文中期、1968、草間俊一）などの他、東北新幹線建設に伴う、高畑遺跡（縄文中期、1974)、大明神遺跡（弥生、平安期、1974)、大曲遺跡（平安期、1974)、幅遺跡（1974)や東北縦貫自動車道建設に伴う大地渡遺跡（縄文中期、平安期、1974)、大瀬川Ａ遺跡(縄文中期平安期、1974)、大瀬川Ｂ遺跡(中世、1973)、大瀬川Ｃ遺跡(中世館跡、1974)、野田遺跡(1973)、上台遺跡(平安期、1974)、河川改修に伴う五大堂安堵屋敷遺跡（縄文晩期、1980)などである。

３．周辺の城館

石鳥谷町及びその周辺の城館で確認されているものは第２図に示すとおりである。[注1] 石鳥谷町の城館は山麓部や段丘縁辺部、独立丘陵上などの要地に占地している。北上川西岸では、段丘の東縁部にあって、大瀬川館、富沢館、寺林城、小森林館はほぼ一直線等間隔に並んでいる。そ

第１表　石鳥谷町内の城館跡

No.	名称	所在地	規模	標高	比高	遺構・遺物	城主	築城年代	現状	寺社	主要文献・その他
1	赤間館	戸塚	150×300	123m	23m				山林、畑地		
2	猪鼻館	猪鼻	120×150	100	10	堀、井戸	猪鼻弥十郎	天正以前	山林、寺院	広済寺	内史略 郡内郷村誌
3	江曽館（北・中館）	江曽	300×500	87	7	堀、土塁	藤原氏？		山林	弘源神社	太郎平藤文書、石鳥谷町史、日本の城
4	大瀬川館（西館）	大瀬川	300×300	177	30	郭、堀、土塁、城物	瀬川重行		山林 自動車道	木の宮神社	郡内郷村誌 瀬川神貫系図
5	北寺林館	北寺林	180×120	115	8	堀			山林	稲荷神社	
6	黒沼館	黒沼	80×90	83	2	堀、土塁	黒沼清太夫	天正年中	宅地、寺院	長楽寺	神貫郷村誌 内史略
7	小館	好地	60×60	84	4	堀			山林		
8	古館	好地	(250×350)	92	2	堀			宅地、山林	熊野神社	
9	小森林館（小・森館）	小森林	300×450	91	7	郭、堀、土塁	小森林治郎	天正以前	山林	子守神社 神明宮神社	神貫郷村誌、内史略 奥羽永慶軍記
10	笹原館	滝田	120×120	95	8	堀、土塁	滝田大学	天正6（1578）	宅地	熊石五社 稲荷神社	
11	寺院館（中館）	新堀	180×180	95	5	堀、土塁	新堀作左衛	天正	田畑	大日堂	内史略、郡内郷村誌 奥南落城記
12	下館	新堀	250×250	125	30	堀、土塁			山林、畑地	稲荷社	内史略 郡内郷村誌
13	隅っこ館	五大堂	200×300	135	37	郭、堀、土塁			山林	光明寺 五大堂	
14	関口館	関口	300×200	82	4	堀	関口小五郎	文明15（1483）	宅地、田畑	熊野神社	郡内郷村誌 内史略
15	大川原館	滝田	150×150	103	8	堀	大川原氏		田畑、宅地	大川原大明神	八重畑村誌
16	寺林城	中寺林	250×250	107	7	堀	河野通重	弘安3（1280）	寺院、境内	光林寺	内史略
17	富沢館	富沢	200×200	120	13	堀			田畑、宅地	稲荷神社	
18	新堀館（上館）	新堀	300×250	194	89	郭、堀、土塁	江刺長作	天正19（1591）	山林	新堀寺 稲荷神社	内史略 野沢宝史碑
19	長谷堂館	長谷堂	200×200	165	30	郭、堀、土塁 石垣、城米	沢田氏		畑地、寺院	長谷堂	
20	畑の沢館	畑	(100×60)	250	30				山林	伝常酒寺	
21	猪中館	好地	200×200	99	9	堀、陶磁器			宅地、田畑	熊野神社	
22	八重畑館（大館）	八重畑	300×250	82	9	堀	八重畑信盛	永享7（1435）	田畑、宅地	八幡社	内史略 郡内郷村誌
23	南館（大瀬川の館）	江曽	300×200	89	11	堀、井戸、土塁	安倍氏？		宅地、田畑	弘源神社 水天宮ほか	神貫郷村誌
24	芳館	富沢	(60×100)	140	3				宅地、山林		石鳥谷町史

岩手県教育委員会「岩手県文化財調査報告書第57集・大瀬川Ａ－Ｃ遺跡」による

して富沢館西方の山麓部に長谷堂館、芳館、東方には北寺林館がある。小森林館東方には黒沼館がある。北上川沿いには石鳥谷市街の北に古館、南西に偏中館、南に小館があり、小森林館南東に江曽館、柳館がある。北上川東岸の山麓部には北から新堀館（上館)(石鳥谷市街東方)、侍従館（中館)、下館、赤間館、笹原館、猪鼻館、隅っこ館、八重畑館がある。また小森林館と隅っこ館の中間には関口館がある。

中世において、これらの石鳥谷町の城館は稗貫氏が支配したものと思われる。稗貫氏は稗貫53郷を支配下においたと伝えられ、石鳥谷町をはじめ花巻市、大迫町、東和町西部などがその版図で、各地に城館[註2]があり、稗貫氏の一族及び家臣が居住したとされる。

稗貫氏は鎌倉時代にこの地に入部し、当初小瀬川館（瀬川館という説あり）に居住したが、次に大瀬川館（十八ヶ(サカリ)城、または絲繰城という説あり）に移り、最終的には享禄年中又は永禄年中に十八ヶ(サカリ)城若しくは鳥谷崎（十八ヶ崎）城に居住したとされている[註3]。鳥谷崎城は後の花巻城で十八ヶ崎城とも記されており、十八ヶ(サカリ)城(本館カ)との関連は不明であるが、稗貫氏が最後に居住したのは鳥谷崎城であることは確実なことと思われる。

稗貫氏の一族及び家臣をみると[註4]、似内氏、矢沢氏、十二丁目氏、根子氏、平沢氏、高橋(台)氏、北湯口氏、大畑氏、狼沢氏、葛氏などが花巻市に、新堀氏、関口氏、瀬川氏、小森林氏、黒沼氏、河野（寺林）氏などが石鳥谷町に、大迫氏、亀ヶ森氏が大迫町に、小山田氏が東和町に居住している。その他にも稗貫郡内の各地の地名を冠する人々が史料に見られ、更に郡外の地名を名乗る者も見られる。稗貫氏の勢力が稗貫郡外にまでのびていたことがあったのかも知れない。

稗貫氏は天正18年（1590年）広忠の時に、豊臣秀吉の奥州仕置にあい滅亡する。その後稗貫郡は南部氏の領地となる。天正20年（1592年)の記録[註5]には鳥谷崎城、新堀城の他は破却とある。この記録には前記２城も含めて５城の名称がでているのみであるが、稗貫郡下の城館はその頃殆んど破却されたものと思われる。新堀城は、稗貫氏滅亡後入城した江刺氏が一時居住したが、その後土沢城に移るに及び、廃城になったと伝えられる(慶長17年・1612年)。結局鳥谷崎城(花巻城）のみが南部氏の稗貫・和賀両郡統治の拠点として残ったものであろう。

４．小森林館

小森林館についての記述は「邦内郷村誌[註6]　巻７」に○小森林故館　自二黒沼館一良大也。天正頃主號二治部少輔一云。とあり、「稗貫郡旧記[註7]」には　黒沼村の条　（小森林古城趾）　一　小森林古城趾　同村に有　こは則稗貫の老臣小森林大隅守の居住せる地也　其子孫天正の頃の主を治部少輔と云と云々　とある。

小森林館は稗貫郡石鳥谷町字小森林にあり、平面直角座標第Ｘ系におけるＸ＝＋26.25～

+26.64km、Y＝−60.76〜−60.89km付近である。国鉄石巻谷駅から南方4km、花巻空港から北方3kmにある。北上川の西約1.2kmの中位段丘の東縁部に位置する。

小森林館がいつ頃誰によって築造されたかは不明である。また小森林氏がこの館にいつ頃から居住したかもわからないが、永享7〜8年（1435〜36年）の稗貫・和賀地方の兵乱[注8]の際、小森林治部少輔が稗貫氏の従士として参加している[注9]から、この頃には居住していたことは考えられる。上記史料によれば、小森林大隅守が居住したとあり、その子孫が天正の頃(1573〜91年)治部少輔と号したとある。天正の治部少輔は永享の頃の治部少輔とは別人であろうから襲名と思われるが、大隅守は永享以前の人なのか以後の人なのかわからない。当初の館主であったことも考えられる。

天正18年（1590年）奥州仕置で追放された稗貫氏は和賀氏と共に一揆軍をおこしたが、失敗して滅亡している。この時の稗貫軍の中に小森林治部の名[注10]がある。「稗貫家譜」[注11]では稗貫氏滅亡を記した後に稗貫の従士の一人として小森林大隅の名がでているが、一揆の記事中にはなく、上記の治部のみである。この両者の関係はわからない。或いは同一人物であるかもしれない。

小森林氏は、稗貫氏と共に滅亡し、館も破却されたものであろう。

小森林館の現状は、明確に確認できるところ、東西300m、南北400mほどの規模で、北の郭と南の郭に分かれている。館の大部分は北の郭が占めており東西300m、南北300mほどである。この郭の内部には、北東部を東西100m、南北150mほどに区画する堀と土塁がL字形に築かれてある。その中に現在子守観世音の祠があり、周囲に石碑がたっている。

北の郭の北側を流れる滝沢川は現在改修されているが、蛇行した痕跡が館北西部に残存しており、水堀状になっている。この滝沢川は館の北側の堀として機能していたと思われる。館が占地する段丘は西に向って徐々に標高を高くしているが、それを断ち切るように館の西側の堀が南北方向に造られている。館の南側には大きな沢が西から東へ走り、北の郭と南の郭を区画する沢と合流して、蛇行して館の東側を流れる滝沢川に合流する。館の東側は、段丘縁に現在人家があり、段丘下には用水路があるなど、旧状は不明の部分が多い。しかし滝沢川が大きく蛇行して東側を画していたことは考えられる。

館の北端は滝沢川の改修によって一部破壊されており、土塁の存在は確認できないが、L字形に北の郭を区画した堀と土塁の突端部から西に向って高さ1.4〜2mほどの土塁が認められる。この土塁は西側の堀の内側に沿って続き、北の郭の南側までのびて、北の郭の北から西そして南と逆コ字形に館を包むように構築されている。館の東側は前述のように人家があることなどのためか土塁を確認できない。西側の土塁は特に保存がよく、それは堀の外側にも認められ、堀の北端から中央付近まで残存している。この付近では堀の幅は底部で5mほどあり、現状で堀底面から土塁の上端までは3〜4mほどである。また西側堀中央付近には土橋があり、土橋の

内側にあたる部分では広く土塁が切れ、門などの施設があったことが考えられる。これより南の方にも低い位置に土橋状のものが認められるが、当時のものであるかどうかは不明である。その他郭の北側にも２ヵ所に土塁が切れて、土橋状のものがあるが、材木などの切出しのため設けられたトラックなどの進入路で最近のものと考えられる。

南の郭では、土塁は西側に構築された堀に沿って認められ、それは堀の外側の一部にもある。そしてその北端に近いところには土橋がある。

館の西側は現在水田として開析されており、東北本線が南北に走っている。そのため旧状を知ることが難かしく、西の郭の存在も考えられるものの、確定することはできない。本報告では北の郭と南の郭だけを館として報告する。

註１．「探訪日本の城」１　小学館（1977）
　　「日本城郭大系」２　新人物往来社（1980）
　　「岩手県文化財調査報告書第57集・大瀬川Ａ～Ｃ遺跡」岩手県教育委員会（1981）
註２．上掲
註３．「石鳥谷町史」上　石鳥谷町（1979）
　　「邦内郷村誌」巻七（南部叢書５）南部叢書刊行会（1929）
　　「内史略」１　岩手県文化財愛護協会（1973）
　　「奥々風土記」（南部叢書１）　南部叢書刊行会（1927）
註４．上掲註３
註５．「聞老遺事」（南部叢書２）　南部叢書刊行会（1928）
註６．前掲「南部叢書」５所収
註７．前掲「内史略」１所収
註８．前掲「聞老遺事」
註９．「吾妻むかし物語」（南部叢書９）南部叢書刊行会（1928）
註10．前掲「内史略」１　稗貫一揆
　　「聞老遺事」「南部根元記」「奥南旧指録」（南部叢書）
註11．前掲「内史略」１所収

〈参考文献〉

「岩手県史」２・３　岩手県　名著出版（1961）
「岩手県郷土史年表」田中喜多美編　萬葉堂書店（1978）
「南部諸城之研究」沼館愛三　青森県文化財保護協会（1978）

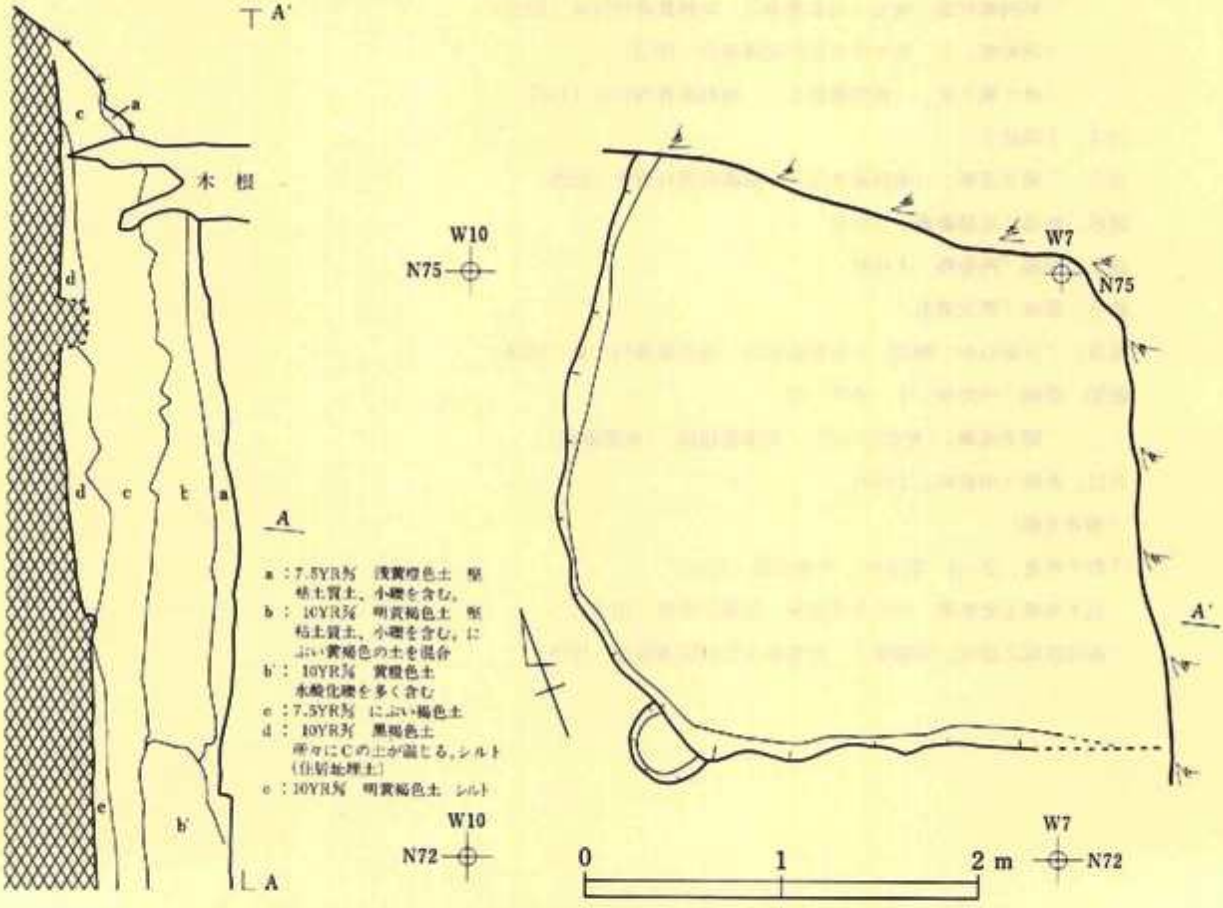
Ⅲ．検出された遺構と遺物

1．竪穴住居址

DⅠc５住居址

遺構（第６図：写真図版４）

この住居址は、ＤＩ区即ち国道４号の西側の調査区のほぼ中央で検出されたもので、東側は国道４号、北側は林道によって切られている。この付近には林道開設の時と思われる盛土があり、また当時の生活面と思われる面での検出ができず、検出面は表土下70cmの明黄褐色土上面である。住居址の掘り込みは３～５cm程度観察できたのみである。柱穴やカマド、地床炉等は検出されない。カマド等は林道や国道によって切られた部分にあったかも知れない。調査できた範囲は住居址の南西部と思われる部分で、その部分から推定すれば形状は方形または長方形であったと思われ、南北2.7ｍ、東西2.95ｍ残存している。



第６図　DⅠc５住居址

埋土はところどころににぶい褐色シルトと炭化物が混じる黒褐色土である。床面は木根によると思われる凹凸があり、堅くしまっている。床面近くからロクロ使用の土師器坏片が得られ、埋土下位からは把手付土器の把手部分が得られている。その他須恵器甕片が出土した。出土遺物から平安時代の竪穴住居址と考えられる。

出土遺物（第12図）

遺物は土器のみで、数量は少ない。いずれも小破片のため実測できたのは３点のみである。

〈坏形土器〉（第12図１）　ロクロ成形された坏の底部で、床面からの出土である。体部は外傾して開く。内面はヘラミガキ調整後黒色処理が施されている。外面はロクロ痕がみられ、体部下端から底面にかけて切り離し後手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。

〈甕形土器〉（第12図２）　須恵器の甕の破片で、床面からの出土である。内外面ともロクロ痕がみられる。小破片であり、全体の形態は不明であるが、肩部から体部にかけての破片と考えられる。

〈把手付土器〉（第12図３）　把手部分のみが埋土下部から出土した。ロクロ不使用のもので、円筒形を呈し、開口部2.0cm×1.5cm、深さ5.6cmの穴が設けられている。表面はヘラケズリ調整されている。

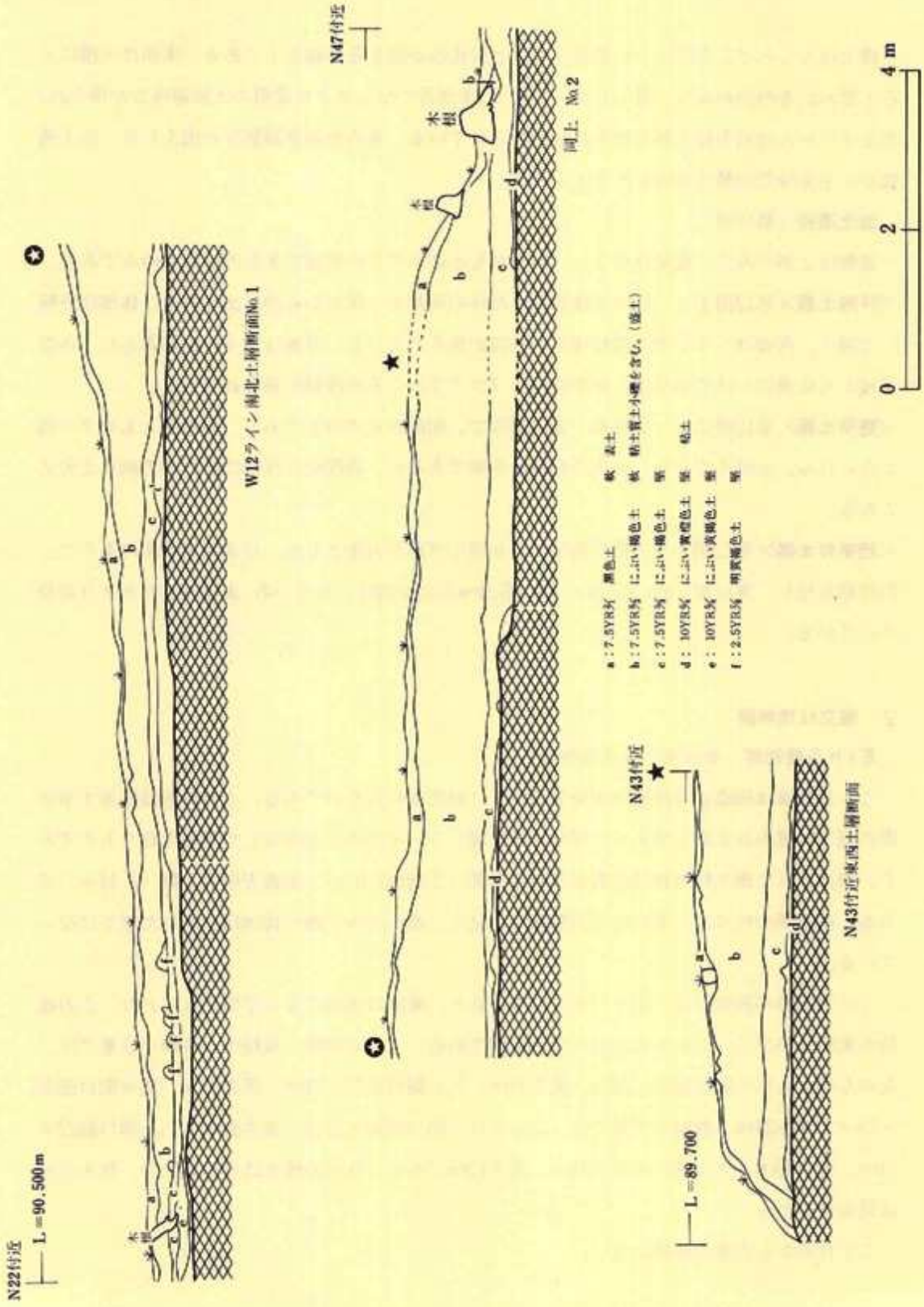
２．掘立柱建物跡

Ｅｌｈ５建物跡（第８図：写真図版５）

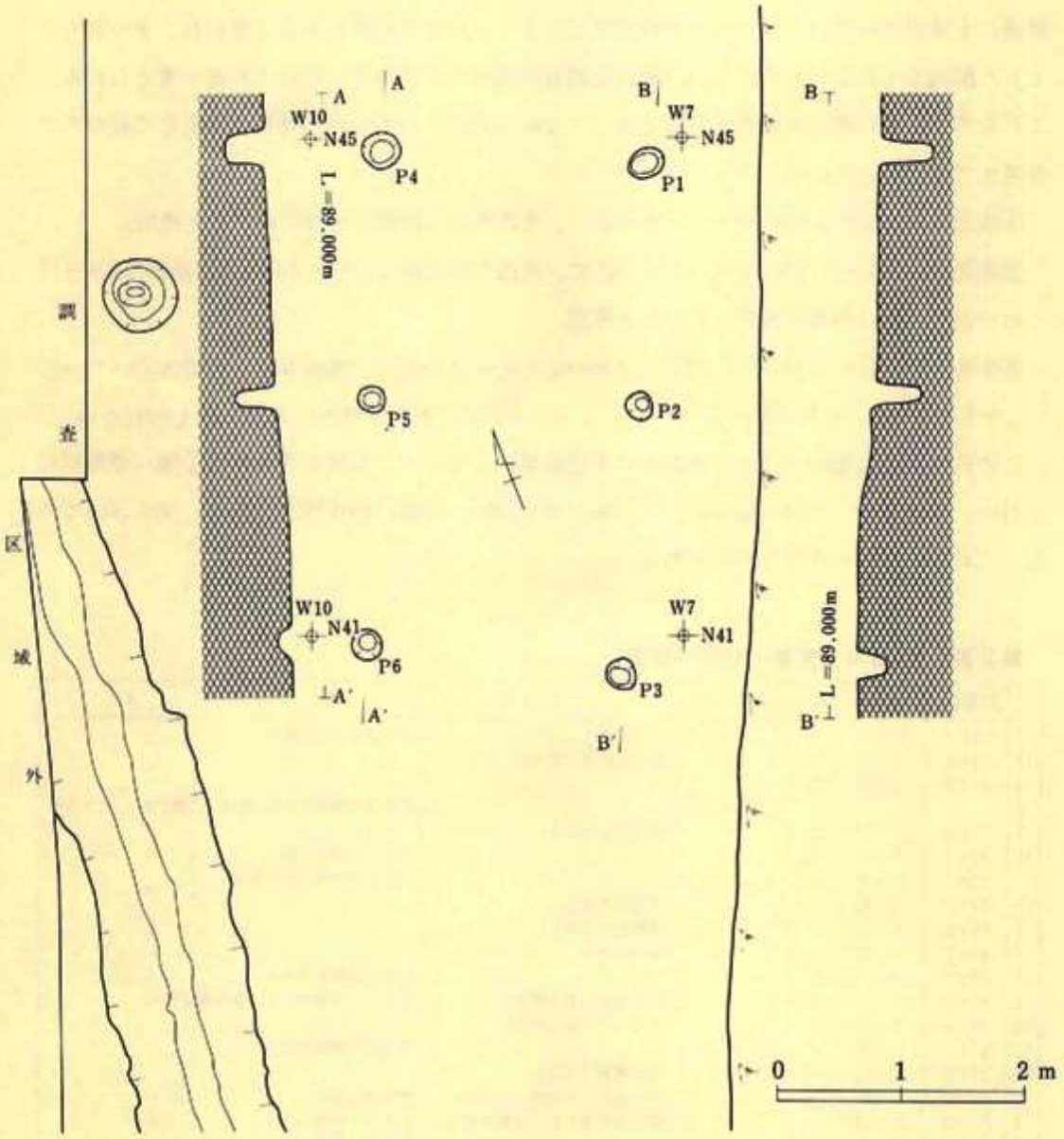
この建物跡は国道４号西側の中央部南寄りに検出されたものである。この付近は国道工事の際の廃土と思われる盛土があった部分（第７図）で、その盛土を除去して発見されたものである。検出された掘立柱建物跡は南北方向に２間（１間は2.0m）、東西方向に１間（2.17m）である。南東隅の柱穴は、他の柱穴の配置から見て、南へ20cm、西へ10cmほどずれた感じになっている。

この建物跡の西側には、南からのびる溝がある。東側は国道によって切られており、この建物が東側にのびていたかも知れないが、不明である。これらの柱穴規模は、東側の３基では、北のものからP_1＝開口部30×24cm、深さ41cm、P_2＝開口部23×21cm、深さ38cm、P_3＝開口部26×23cm、深さ24cm、西側の３基では、北からP_4＝開口部30×28cm、深さ32cm、P_5＝開口部22×21cm、深さ39cm、P_6＝開口部25×25cm、深さ12cmである。柱穴の埋土は暗褐色土で、柱あたりは見られなかった。

この付近からの出土遺物はない。



第7図　EI～FI南北・東西土層断面


調査区域外
A
A
W10
N45
P4
L=89.000m
P5
W10
N41
P6
A'
A'
B
B
W7
N45
P1
P2
W7
N41
P3
B'
B'
L=89.000m
0
1
2 m

第8図　EIh5建物跡

3．柱穴群

Gｌｄ４柱穴群（第９図：写真図版５、６）

この柱穴群は、国道４号西側の調査区域南端部に検出されたもので、南にはこの郭の南を区切る沢があり、その北岸にあたる。柱穴状のピットは多数発見され、調査区域西側の境界線の断面にも発見されている。これらの柱穴状ピットの中には木根跡もあると思われ、またきちんとした配列を示さないものが多い。更には調査区域外にも連続する柱穴の存在が考えられる。これらのことから建物を確定することはできなかったが、いくつかの建物を推定して見たので参考までにそれを次に示す。

①南北方向はⓇ←3.5cm→Ⓡ←3.1ｍ→Ⓡで、東西方向は西側区域外にのびると推定。

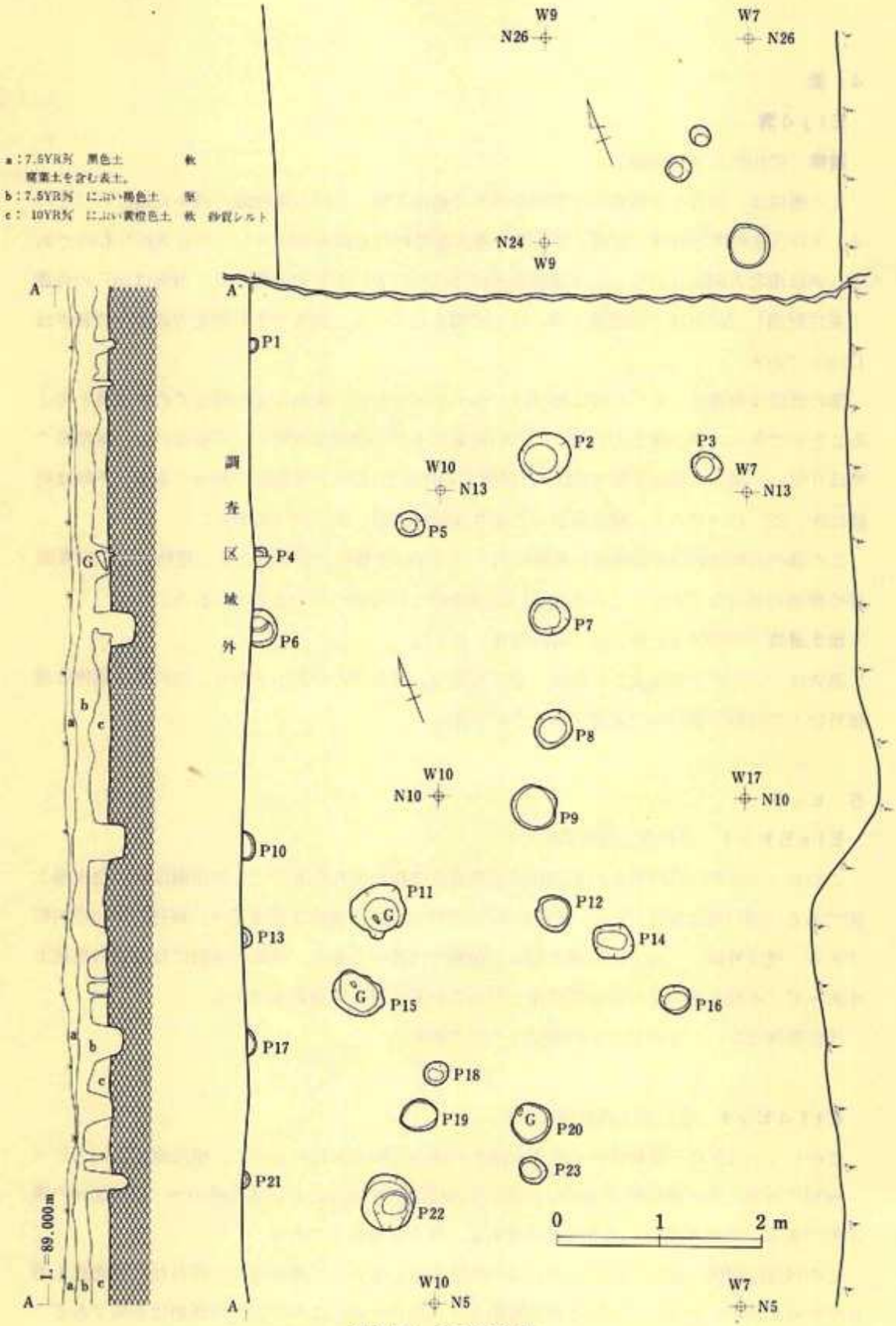
②南北方向はⓇ←1.1ｍ→Ⓡ←1.8ｍ→Ⓡで、東西方向北側はⓇ←2.8ｍ→Ⓡ、南側はⓇ←1.7ｍ→Ⓡで、更に西側区域外にのびると推定。

③南北方向はⓇ←2.3ｍ→Ⓡと Ⓡ←2.5ｍ→Ⓡと Ⓡ←？→Ⓡで、東西方向の北側はⓇ←？→Ⓡ←1.9ｍ→Ⓡ、南側はⓇ←1.6ｍ→Ⓡ←1.9ｍ→Ⓡで、西側区域外にのびるかも知れない。

この柱穴群から北10ｍほどにあたるＦＩ区南側にも柱穴が３基検出された。①開口部規模43×41cm、深さ21cm、②開口部規模21×19cm、深さ23cm、③開口部規模25×23cm、深さ３cmである。これらの柱穴の性格は不明である。

第２表　Gｌｄ４柱穴群・柱穴一覧表

	開口部規模(cm)	底部規模(cm)	深さ(cm)	埋土の状態	備考
1	14×？	12×？	6	にぶい褐色土	約半分は調査区域外
2	50×45	30×30	32	〃　混合土が斜位に入る	
3	30×28	20×18	25	？	
4	？	？	5	にぶい褐色土	約半分は調査区域外，開口部に礫があり，形状不明
5	27×24	15×14	31	〃　黄褐色土少量含む	
6	36×？	25×？	19	〃	約半分は調査区域外
	22×？	11×？	24	〃	上記底面の副穴状の部分
7	40×37	26×25	26	〃　周囲は黄褐色土	
8	38×33	25×23	16	〃　黄褐色土少量含む	
9	45×42	40×37	53	〃　風化礫含む	
10	28×？	26×？	16	〃	約半分は調査区域外
11	50×45	35×32	30	〃　黄褐色土、風化礫含む	柱あたりが見られる。礫底面に有り
12	38×35	26×25	20	〃　黄褐色土、風化礫含む	
13	20×？	10×？	2	〃	約半分は調査区域外
14	38×35	30×17	57	〃　風化礫極少量含む	
15	50×40	45×30	36	〃　黄褐色土、風化礫、木根含む	礫底面に有り
16	31×28	25×18	18	〃　風化礫少量含む、壁際黄褐色土	柱あたりが見られる
17	27×？	22×？	14	〃	約半分は調査区域外
18	25×21	14×11	8	？	
19	36×31	35×27	39	にぶい褐色土、黄褐色土、風化礫、木根含む	
20	40×38	34×34	97	暗褐色土、風化礫含む	
21	18×？	10×？	17	にぶい褐色土	約半分は調査区域外
22	55×50	48×45	20	〃　風化礫含む	柱あたりが見られる
	40×33	23×20	56	〃　〃	上記底面の副穴状の部分
23	28×24	20×17	30	〃　壁際砂質黄褐色土	柱あたりが見られる


a：7.5YR系　黒色土　軟
腐葉土を含む表土。
b：7.5YR系　にぶい褐色土　堅
c：10YR系　にぶい黄橙色土　軟　砂質シルト
W9
N26
W7
N26
N24
W9
A
A'
P1
P2
P3
W10
N13
W7
N13
P5
P4
P6
P7
P8
W10
N10
W17
N10
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P23
P21
P22
W10
N5
W7
N5
調査区域外
G
0
1
2 m
L=89.000m

第9図　GId4柱穴群

4．溝

EIｊ4溝

遺構（第10図：写真図版７）

この遺構は、国道４号西側の中央部南寄りに検出され、EIh５建物跡の西から南にのびている。EIh5建物跡と同様、国道工事の際の廃土と思われる盛土を除去して発見されたものである。溝は南北方向に存在し、北側は調査区域外にのびていくものと思われ、南側は107°の角度で東に屈曲し、2.8ｍほどで国道工事によって切られている。調査できた南北方向部分の長さは12.8ｍである。

溝の底面は南側にくらべ北側は30cmほど低くなっており、南から北へ向っての排水路と考えることができる。溝の埋土の上層はにぶい黄褐色土で小礫を含み堅く、下層はにぶい黄橙色でやはり堅い。溝の上幅は北側で120cm、屈曲する付近で115cm、東端部で90cmである。下幅は同様に20、22、45cmである。検出面からの深さは同様に49、30、24cmである。

この溝の北側はEIh5建物跡の西側に当り、1.8ｍほど離れた位置にある。建物跡との位置関係や検出の状況などから、この溝はEIh5建物跡と同時期のものと考えられる。

出土遺物（第18図３、６、11・第20図４、６）

遺物は、鉄滓が少量出土した他は、全て石器で、埋土からの出土である。これらの遺物は遺構外出土の石器と合わせて記述することにする。

5．ピット

EIａ5ピット（第11図：写真図版８）

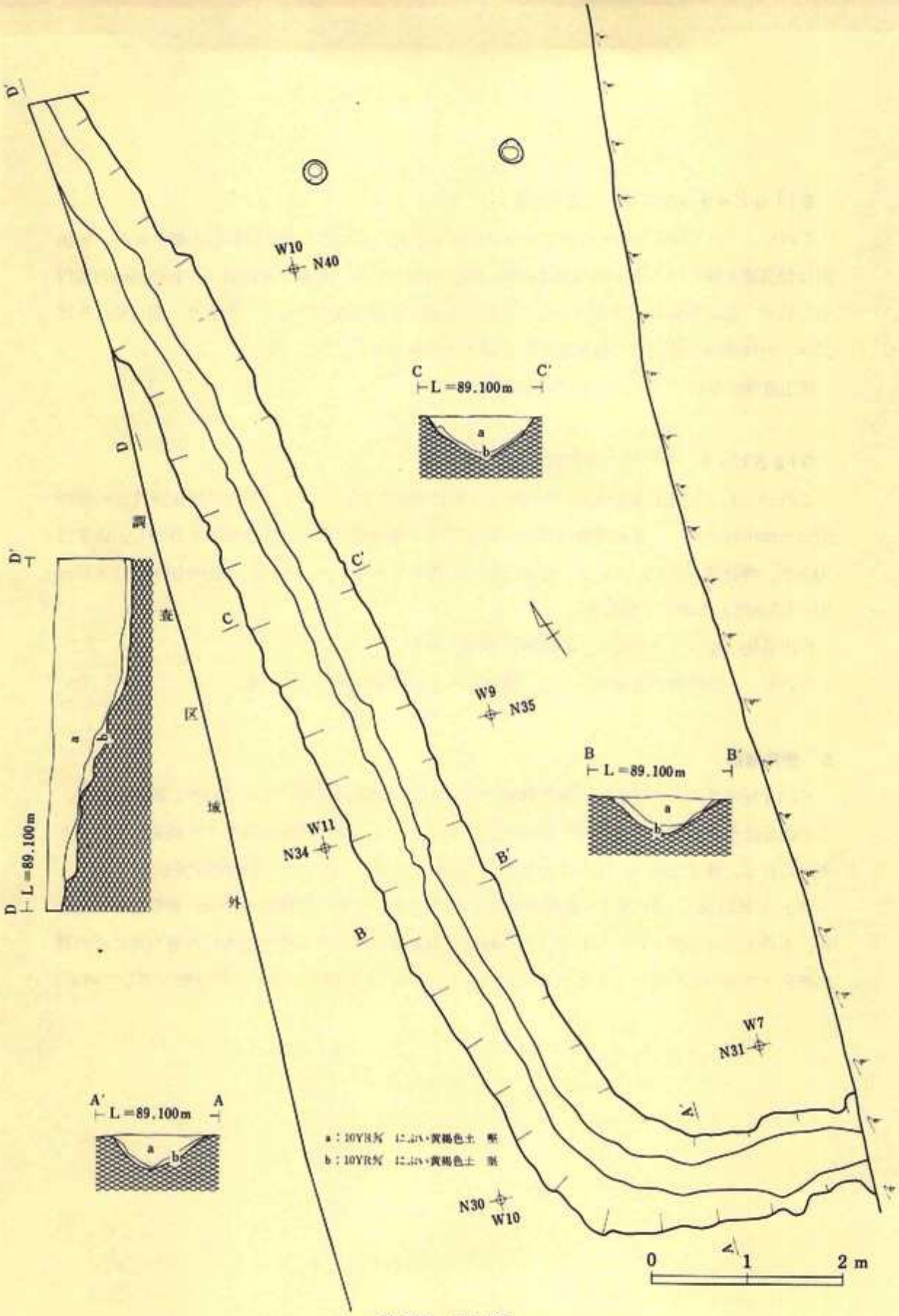
このピットはDIc５住居址の南15ｍほどの地点に検出されたもので、検出面は灰褐色土層上面である。開口部は長径115cm、短径80cmの楕円形を呈し、底部は長径75cm、短径42cmの楕円形である。壁は外傾し、深さは北側で59cm、南側では76cmである。底部の南側には砂質の黒色土があって、それを掘り上げた分だけ深くなっている。埋土は褐色土である。

伴出遺物はない。このピットの時期は不明である。

EIｆ4ピット（第11図：写真図版８）

このピットはEIh5建物跡から北４ｍほどの地点に検出されたもので、検出面はEIａ5ピット同様である。開口部は長径105cm、短径85cmの楕円形を呈し、底部は長径60cm、短径40cmの楕円形である。壁は外傾し、深さは41cmである。埋土は褐色土である。

この付近は周囲に比して低く、弱い沢の状態を示しており、流れ込みと思われる縄文式土器片や石器が出土したが、ピットと直接関係ないと思われる。このピットの時期は不明である。


D'
D
調査区域外
C
C'
B
B'
A
A'
W10
N40
W9
N35
W11
N34
W7
N31
N30
W10
C
L=89.100m
C'
B
L=89.100m
B'
A'
L=89.100m
A
D'
D
L=89.100m
a
b
a：10YR5/4 にぶい黄褐色土 層
b：10YR5/4 にぶい黄褐色土 層
0
1
2 m

第10図　EIj4溝

EIi４ピット（第11図：写真図版８）

このピットはEIa５建物跡の西２ｍほどに検出されたもので、南にはEIj４溝がある。検出面は他遺構と同じである。開口部は直径60cmの円形を呈し、底面は直径44cm、短径38cmの楕円形である。壁は外傾し、深さは13cmである。底面には副穴状の小ピットがあり、開口部は長径27cm、短径20cmの楕円形で検出面からの深さは25cmである。

伴出遺物はない。このピットの時期は不明である。

GIa５ピット（第11図：写真図版８）

このピットはEIj４溝南端部から10ｍほど南に検出されたもので、開口部は長径112cm、短径92cmで楕円形を呈し、底部は長径102cm、短径77cmで楕円形である。壁は大きく外傾し、深さは10cmで、時計皿状を呈している。埋土はにぶい褐色である。ピット内には20×10cm、15×10cm、10×7.5cmほどの礫が７個ある。

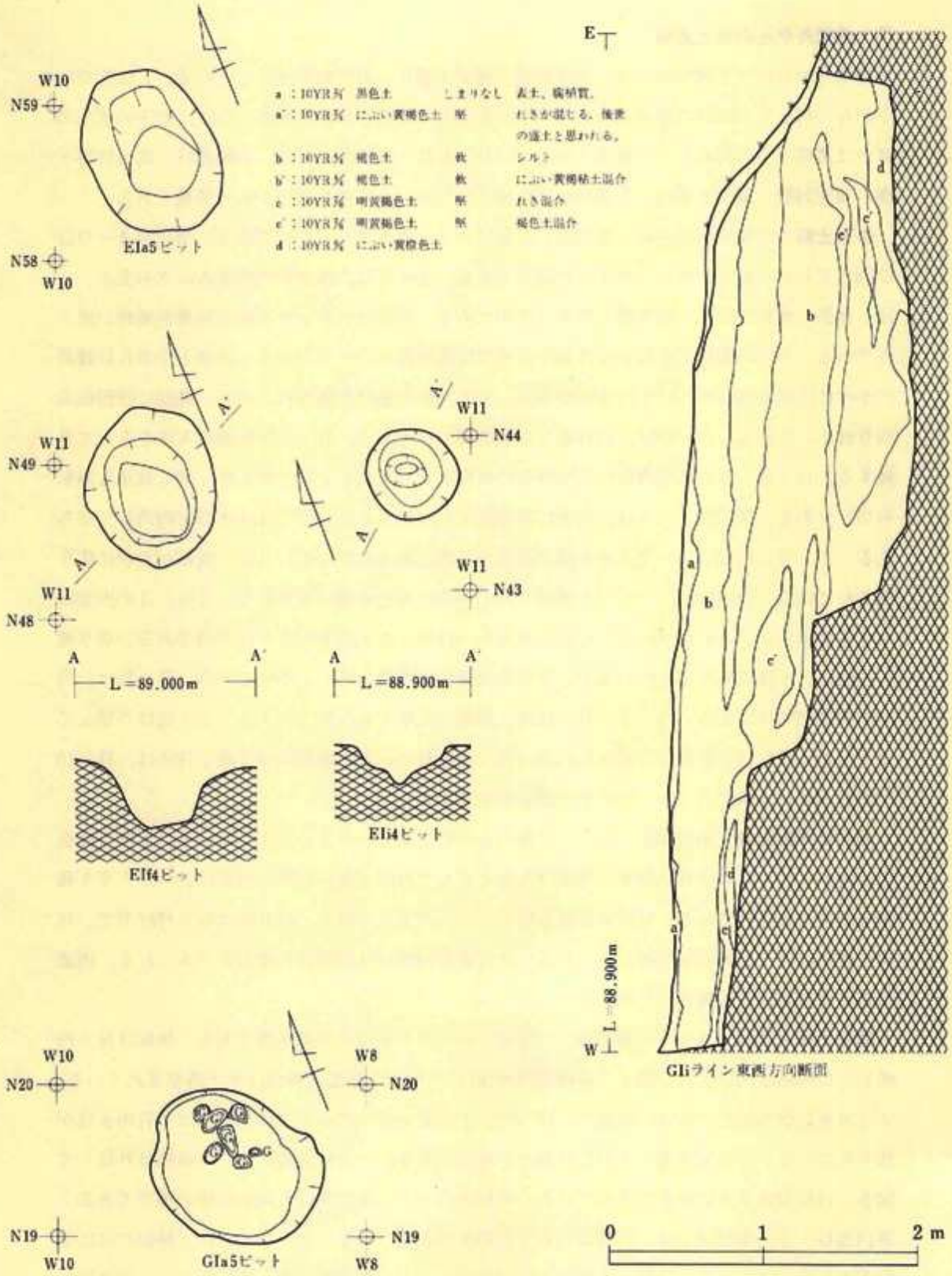
伴出遺物はない。このピットの時期も不明である。

このピットの周辺の遺構外からは、擂鉢片や寛永通寶が出土している。

６．館南端部

GId４柱穴群のある南側は、現在林道の国道４号への取付部分になっている。調査の結果、この部分は小森林館の南を区画する沢の広がりであって、沢の北岸は現在より後退していたと考えられる。林道は沢の一部を埋めたてて作られている。（第４図　遺構配置図参照）

埋土（第11図　GIi ライン東西断面図）をみると、下層には砂質のにぶい黄橙色土が見られ、その上には褐色シルトがあり、その層には明黄褐色粘土で小礫を混合した層や更にその層に褐色土の混合した層などがまだらに入りこんでおり、下位ほど砂まじりの状態を示している。



第11図　ピット，GIiライン東西方向断面

7．遺構外からの出土遺物

遺構外からは、土師器坏・甕、須恵器甕、縄文土器片、石器類が出土している。CIh5グリットから一括して土師器の坏が出土している。出土地点付近を綿密に精査したが、若干の焼土のほかは遺構と認め得るものは検出されなかった。EII・FII区からは、土師器坏・高台付坏・甕、須恵器甕、縄文土器片、石器類が多く出土したが、全て攪乱層中からの発見である。

坏形土器　（第12図4～9・第13図）　全てロクロ成形されたものである。第12図4～9はCIh5グリットから一括して出土した遺物である。4・5は、体部が内湾ぎみに立ち上る。4は、器面の磨耗が著しく切り離し技法は不明である。内面はヘラミガキ調整後黒色処理が施されている。5の内面は、底部から体部中位までは放射線状のヘラミガキ、体部上半から口縁部にかけては横方向へのヘラミガキ調整され、この後黒色処理が施されている。底部には回転糸切り痕がみられる。6～9は、内外面とも無調整の坏である。6・7は体部が丸味をもって外傾する。6・8・9の底部内面には渦巻状の成形痕がみられる。いづれも切り離し技法は回転糸切りである。第13図1～4は、内面に調整痕をもつ坏である。2～4は体部が内湾して立ち上る。1・2の内面は、ヘラミガキ調整後黒色処理が施されている。3は、底部が台状に作り出されている。内面は、ヘラミガキ調整されているが黒色処理は施されていない。4の内面は朱色を呈するが、これが塗られたものであるか、付着したものであるかは不明である。切り離し技法は、1は回転糸切りであるが、その他は器面の磨耗が著しく不明である。5～12は、内面が無調整の坏である。5・7・9・12は、体部が丸味をもって立ち上り、6・10は外傾して立ち上る。5～9の底部は、僅かに台状に作り出されている。底部の切り離し技法は、9・10は磨耗のため不明であるが、その他は回転糸切りである。

高台付坏形土器（第14図1・2）　坏部の上半を欠くものが2点出土している。1は、高台部が短かく「ハ」の字状に開き、坏部は丸味をもって外傾する。坏部の内面は、ヘラミガキ後黒色処理が施されている。2の高台部も短く「ハ」の字状に開く。高台部は取り付け型で、坏部の底面には、回転糸切り痕がみられる。また底部内面には渦巻状の成形痕がみられる。内面調整・黒色処理とも施されていない。

甕形土器（第14図3～7・第15図）　3は、ロクロ不使用の土師器甕である。体部は緩く内傾し、口縁部は内湾ぎみに開く。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整されている。4は須恵器甕の底部である。底面はいびつで、上げ底となっている。体部外面に平行叩き目が施されている。5は須恵器の大形広口甕の口縁部である。ロクロ成形され、口縁部は外反して開き、口唇部は上方に挽き出されている。第14図6・7、第15図は、須恵器甕の破片である。第14図6・7、第15図1は、内外面とも平行叩き目が施される。2～7・14は、外面だけに平行叩き目痕がみられる。7は、平行叩き目が交差し「く」の字状になっている。8～10は外面

には平行叩き目痕・内面には青海波文が施されている。11～12は、外面の平行叩き目が交差して、格子目文状になっている。内面は、外面のものより目の粗い平行叩き目痕が施されている。15は内外面ともロクロ痕がみられる。16は外面にヘラナデ状の調整が施されている。

擂鉢（第16図１～４）　２個体分の破片が出土している。いづれもロクロ成形されている。１は、体部から口縁部にかけて外傾して開き、口縁部は複合口縁となっている。内面には、７本を１組とする幅2.0㎜の条痕が口唇部下5.5㎝まで掻き上げられている。２・３・４は同一個体と考えられる。破片のため、口径・器高は不明である。口縁部外面に張り出しを持ち、内面には６～７本を１組とする幅1.5～2.0㎜の条痕が口唇部下4.0㎝まで掻き上げられている。条痕の上部は、施文後ロクロナデによって磨り消されている。４は底部である。条痕の幅は２・３と比べてやや太く、側面のほか底面にも施されている。底部外面には回転糸切り痕がみられる。

古銭（第16図５）　寛永通寶が１点出土している。

石器（第17図・第18図・第19図・第20図・第21図・第22図１～８）　第17図１・２は半円状扁平打製石斧である。１は両面から大きく剥離し刃部を作り出している。背の部分は片面から調整が加えられている。２は破損品と考えられる。３・４は打製石斧である。３は撥形の打製石斧で、全体に加撃による剥離調整が施されている。表面は両側とも細かい剥離が施されるが、裏面では粗いものとなっている。４は短冊形の打製石斧で、これも全体に両側から加撃による調整が施されている。５は横形の石匙である。両面からの細かい剥離調整によって刃部を作り出している。調整は浅く、器面全体に及ぶものではない。６・７は石ベラである。６は表面に両側からの細かい剥離調整によって刃部を作り出している。７は両面に調整が施されるが、微細なものではない。第18図１～７は掻器類である。１は二枚貝状を呈し、両面に周辺から細かい剥離加工が施されている。刃部となっている部分では特に細かい調整が観察される。５は、素材となっている剥片の剥離面と刃部に施される細部調整面の風化の度合が異り、剥片の再利用を示すものと考えられる。８は、両側からの細部調整によって作り出された突起に注目し石錐とした。９は尖頭器の破損品と考えられる。両面からの加撃と細かい剥離加工によって刃部を作り出している。10は、三角形の一辺に両面から交互に細部調整が施され、これによって作り出されたジグザグで鋭利な稜線部と三角形の頂点を刃部としていると考えられる。第18図11～15・第19図１・２は、ノッチ状の加工が加えられている剥片類である。第18図11～13・15は、細かい調整を連続して刃部を作り出している。第18図14・第19図１・２は、数回の大きな剥離によって刃部を作り出している。第19図３～７は剥片の一部に僅かな加工が加えられる石器類である。第20図１・２は石核と考えられる。３～６は、素材の一部を切断した剥片類である。３は剥片の両側を切断し、切断面以外の縁辺に細かい剥離調整が加えられている。４～６は、２辺を切断することによって鋭利な角を作り出している。これらには、切断以外の細部調整は

みられない。第20図７～９・第21図１～11・第22図１～８は、使用痕をもつ剥片類である。これらには、使用に伴って形成されたと考えられる微細な剥離が観察される。

縄文土器片（第22図９～18）　ＥⅡ、ＦⅡ区の組掘の際10数片が出土した。いずれも小破片であり全体の形態などは不明である。９は複合口縁で、口縁部下4.5cmにヘラ状工具によるものと考えられる刺突文が施される。縄文は単節の斜縄文である。10は口縁部の突起部分で、沈線文が施されている。15は、平行沈線の間にジグザグ状の沈線文が施されている。16は、頂部に沈線をもつ縦位の貼付文と横位の半截竹管文が施されている。17・18は、頂部に沈線をもつ貼付文が施されている。縄文は無節の斜縄文である。

Ⅳ．ま　と　め

調査区域は、小森林館をとおる国道４号両側で、国道工事のため掘り割った斜面も含めて、国道の西側、東側それぞれ幅７ｍで長さ140ｍほどである。小森林館全体から見るとほんの一部に過ぎない。

遺構が発見されたのは国道西側部分で５×80ｍの範囲である。館施設と考えられる遺構は掘立柱建物跡と溝ぐらいのもので、それも時代決定の決め手となるような伴出遺物は得られていない。これらの遺構は調査できなかった区域にものびることが考えられ、個々について考察するまでには至らない。

平安時代の遺構として竪穴住居址１棟を調査した。床面から出土したロクロ使用底部再調整の坏などから判断したものであるが、この住居址は大分破壊されており、カマドなどは調査できなかったものである。

ピット４基は、いずれも規模の小さいもので、その性格については不明である。

遺構外からいくつかの遺物が得られている。国道西側のＣＩ区の中央付近にはロクロ使用の土師器坏片と思われるものがまとまって出土しており、住居址などの存在も考えられたが、出土した地点は国道工事で切られた部分であり、その存在を確認することはできなかった。国道西側ではその他にＥＩ区に縄文土器片や石器類が出土している。この部分は弱い沢状を呈しており、流れこみと思われる。ＦＩ区からＧＩ区にかけては擂鉢片や寛永通寶が出土している。これらの遺物は江戸時代のもので館とは直接関係ないものと思われる。

国道東側のＦII付近では、ロクロ使用の土師器坏片や土師器甕片、須恵器片、石器などが出土しており、遺構の存在も考えられたが、確認できなかった。

出土遺物は、古代土器類、縄文土器片、石器類、近世に属すると考えられる擂鉢がある。館そのものに伴う遺物は発見されなかった。

（１）古代土器類

古代に属する土器は、土師器坏、高台付坏、甕、須恵器甕である。しかし、これらの量は極めて少なく類型化できるだけの資料性に乏しい。ここでは土器の様相を主体として述べることにする。

坏、高台付坏は全てロクロ成形されている。内面はヘラミガキ調整後黒色処理が施されているものと、無調整のものが共伴している。底部の切り離しのわかるものは全て回転糸切りで、切り離し後に再調整が加えられるものはＣＩｈ５住居址出土の１点のみである。　須恵器甕は大

形のものと考えられ、体部には平行叩き目痕がみられる。これらの土師器と須恵器は共伴するものと考えられる。坏形土器に内外面無調整のものが比較的多く存在する点や、底部の切り離し技法に回転糸切りが多いことなどから推定すると、これらの土器はロクロ技術の定着時のものと考えられる。ここでは高橋信雄の見解（1982）にしたがい、これらの土器を9世紀末から10世紀代に考えたい。

（2）縄文土器片・石器類

縄文土器はいずれも小破片であり、詳細は不明である。しかし、複合口縁や沈線文・沈線文を伴う貼り付け文・刺突文などから推定して、縄文時代前期末葉に位置づけられる大木6式に併行するものではないかと考えられる。

今回出土した石器の多くは、明確に器種を同定できるものは少なく、本来不定形石器として扱われるものである。出土層位は全て攪乱層中であるが、前述の縄文土器片に伴うものと考えられる。

以上の調査結果から、本遺跡は縄文時代や平安時代などの遺構の存在も確実であり、特に館跡として、一部破壊を受けているが、保存状態は良好であり、当地方の近世史を物語る小森林氏の居館の全様を知る貴重な史跡といえる。

〈参考文献〉

1．高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正（1982）：岩手の土器、岩手県立博物館

2．小笠原好彦（1976）：東北における平安時代の土器についての二、三の問題、東北考古学会編・東北考古学の諸問題、寧楽社

3．桑原滋郎（1976）：須恵系土器について、上掲2

4．三浦謙一（1983）：湯沢遺跡発掘調査報告書（遺物編）、岩手県埋文センター文化財調査報告書第66集

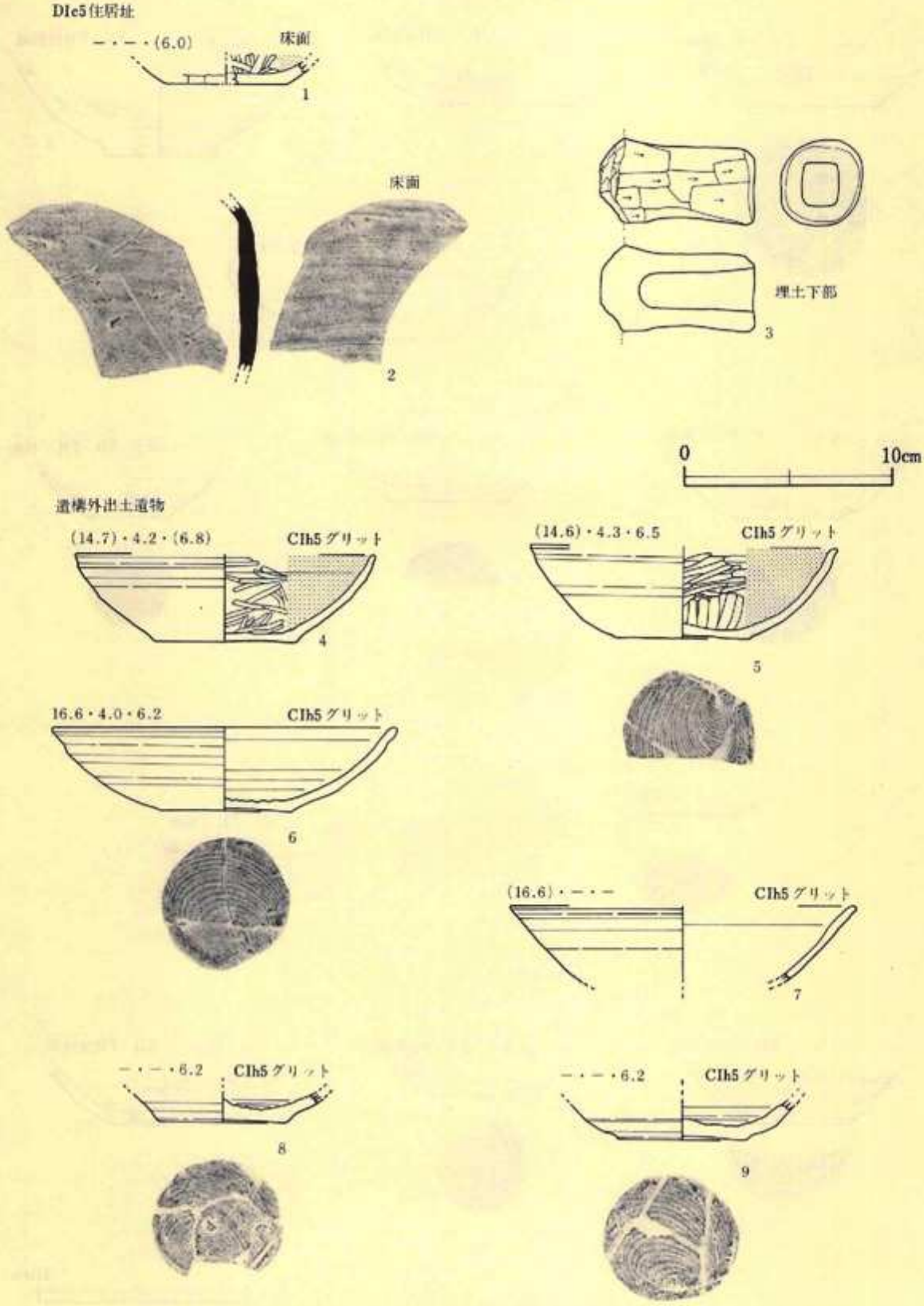
5．阿子島香（1979）：折断調整石器、聖山、東北大学文学部考古学研究会

6．高橋文夫（1982）：縄文時代の彫器、紀要II、岩手県埋蔵文化財センター

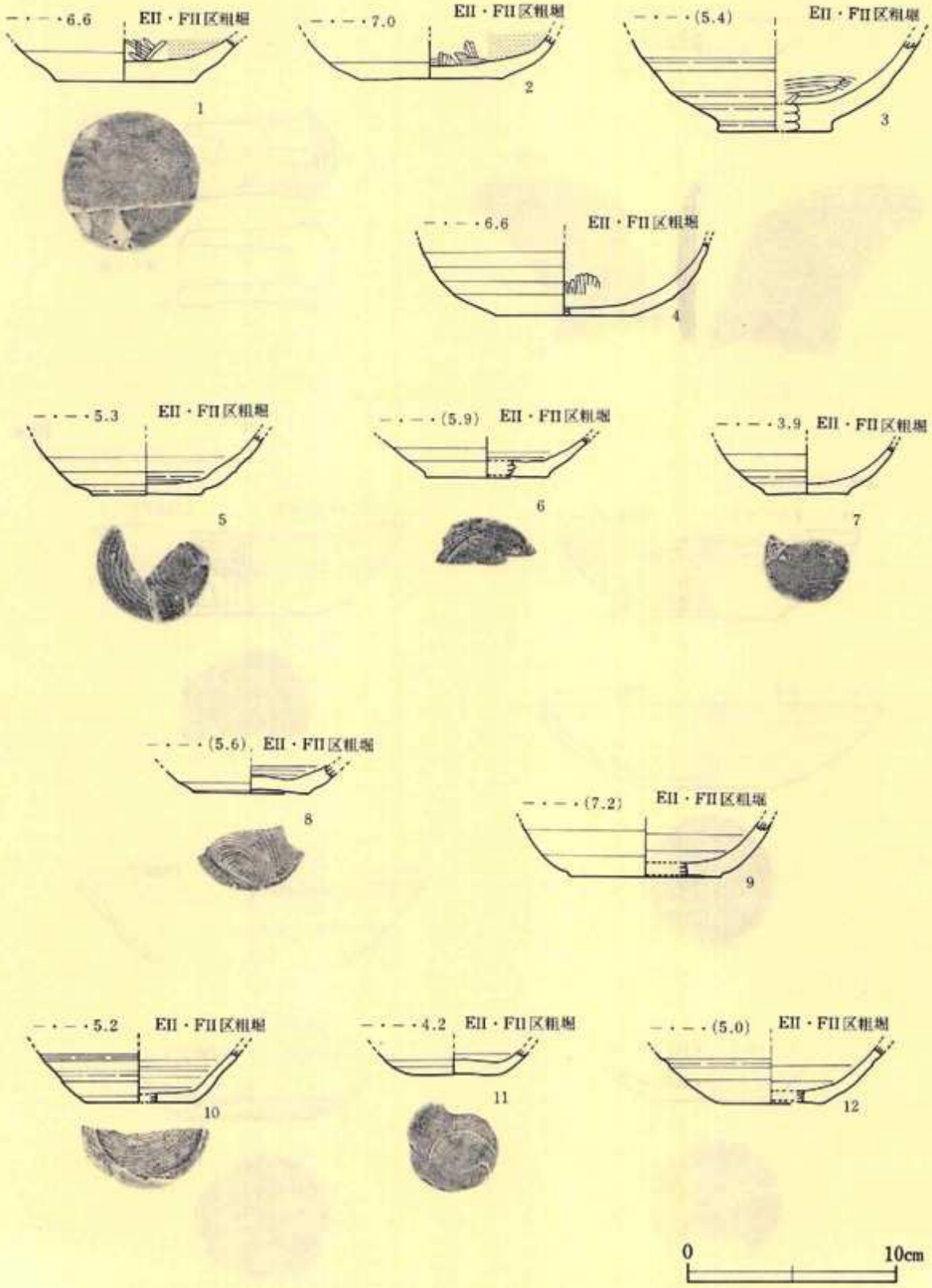
第3表　石器計測表

番号	図版番号	名　　称	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質　　質	産　地	出土地点	備　　考
1	第17図1	半円状扁平打製石斧	129.2	60.1	16.85	196.0	千枚岩	北上山地	EII・FII組掘	
2	2	〃	64.3	47.5	17.8	65.0	チャート質粘板岩	〃	〃　〃	破損品
3	3	打製石斧	118.5	48.7	21.1	125.0	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地	GI区　〃	
4	4	〃	85.8	35.5	20.0	58.3	珪質細粒凝灰岩	〃	EII・FII　〃	
5	5	石匙	34.1	47.0	6.15	8.35	〃	〃	〃　〃	
6	6	石匙	38.6	29.4	8.5	16.2	珪質凝灰質泥岩	〃	〃　〃	
7	7	〃	61.2	26.0	15.5	22.05	チャート質粘板岩	北上山地	〃　〃	
8	第18図1	スクレイパー（ラウンドスクレイパー？）	32.8	29.2	11.8	8.6	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地	〃　〃	
9	2	スクレイパー（ダブルスクレイパー？）	18.7	28.4	9.6	7.9	〃	〃	〃　〃	
10	3	スクレイパー	33.4	11.1		1.65	珪質凝灰質泥岩	〃	EIj4溝埋土	磨製石斧の再利用
11	4	石匙（スクレイパー）	46.4	27.6	10.4	12.25	珪質細粒凝灰岩	〃	EII・FII組掘	
12	5	スクレイパー	45.6	23.3	13.0	12.35	〃	北上山地	〃　〃	剥片の再利用
13	6	〃	30.3	30.8	8.4	6.5	珪質凝灰質泥岩	奥羽山地	EIj4溝埋土	
14	7	〃	29.95	23.2	11.0	7.8	珪質細粒凝灰岩	〃	EII・FII組掘	
15	8	石錐（？）	37.8	28.1	9.7	11.75	硬質凝灰泥岩	〃	〃　〃	
16	9	尖頭石器	68.2	29.5	12.7	22.3	チャート質粘板岩	北上山地	〃　〃	破損品（？）
17	10	ナイフ（？）	37.7	27.0	5.4	4.8	〃	〃	〃　〃	
18	11	ノッチ	40.1	23.5	6.8	6.0	珪質凝灰質泥岩	奥羽山地	EIj4溝埋土	
19	12	〃	54.8	36.7	22.6	39.7	チャート質粘板岩	北上山地	EII・FII組掘	
20	13	〃	37.8	26.9	8.6	12.0	石英		〃　〃	
21	14	〃	55.4	47.5	15.5	27.9	チャート質粘板岩	北上山土	〃　〃	
22	15	〃	51.2	25.7	8.8	11.9	〃	〃	〃　〃	
23	第19図1	〃	42.6	64.9	9.1	18.55	硬砂泥岩	奥羽山地	〃　〃	
24	2	〃	60.0	35.2	13.4	24.3	石英		〃　〃	
25	3	リタッチドフレイク	54.4	53.7	15.9	51.4	珪質凝灰質泥岩	奥羽山地	〃　〃	
26	4	〃	74.0	51.8	15.3	61.0	珪質細粒凝灰岩	〃	〃　〃	
27	5	〃	53.8	52.1	14.0	34.1	硬砂泥岩	〃	〃　〃	
28	6	〃	60.4	32.4	19.9	26.2	〃	〃	〃　〃	スクレイパーの機能（？）
29	7	〃	82.6	49.4	15.7	57.9	チャート質粘板岩	北上山地	〃　〃	
30	第20図1	残核	40.9	44.1	22.6	43.1	チャート質粘板岩	北上山地	〃　〃	
31	2	〃	40.8	40.5	20.9	44.95	珪質凝灰質泥岩	奥羽山地	〃　〃	
32	3	切断石器	22.8	25.3	5.9	3.35	硬質凝灰質泥岩	〃	〃　〃	
33	4	〃	42.2	20.0	5.1	3.7	チャート質粘板岩	北上山地	EIj4溝埋土	
34	5	〃	27.65	25.2	3.6	2.2	硬砂泥岩	奥羽山地	EII・FII組掘	
35	6	〃	36.95	19.4	6.4	3.9	チャート質粘板岩	北上山地	EIj4溝埋土	
36	7	Uフレイク	112.0	79.4	24.8	190.0	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地	EII・FII組掘	
37	8	〃	49.45	37.0	12.8	21.9	珪質細粒凝灰岩	〃	〃　〃	
38	9	〃	54.0	30.0	11.7	12.15	硬砂泥岩	〃	〃　〃	
39	第21図1	〃	60.0	51.7	15.8	32.75	珪質細粒凝灰岩	〃	〃　〃	
40	2	〃	64.0	49.8	8.5	31.55	〃	〃	〃　〃	
41	3	〃	58.75	35.0	10.6	19.75	硬砂泥岩	〃	〃　〃	
42	4	〃	22.0	19.6	8.0	2.55	〃	〃	〃　〃	
43	5	〃	46.4	30.4	11.4	11.2	〃	奥羽山地	〃　〃	
44	6	〃	32.0	29.1	8.3	8.05	珪質細粒凝灰岩	〃	〃　〃	
45	7	〃	36.0	34.2	12.8	16.0	硬砂泥岩	〃	〃　〃	
46	8	〃	45.8	32.5	12.2	14.55	〃	〃	〃　〃	
47	9	〃	34.8	29.0	5.8	7.85	珪質凝灰質泥岩	〃	〃　〃	
48	10	〃	36.8	39.2	8.5	9.65	硬砂泥岩	〃	〃　〃	
49	11	〃	40.8	31.9	13.6	15.5	〃	〃	〃　〃	
50	第22図1	〃	28.6	29.8	5.25	3.35	珪質細粒凝灰岩	〃	〃　〃	
51	2	〃	38.4	21.6	7.2	5.15	チャート質粘板岩	北上山地	〃　〃	
52	3	〃	24.7	20.2	8.4	3.55	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地	〃　〃	
53	4	〃	27.3	22.9	9.7	6.05	珪質泥岩	〃	〃　〃	
54	5	〃	52.5	45.0	11.6	27.05	珪質凝灰質泥岩	〃	〃　〃	
55	6	〃	22.05	25.6	9.6	3.35	珪質細粒凝灰岩	〃	〃　〃	
56	7	〃	46.0	22.0	9.5	8.05	珪質凝灰質泥岩	〃	〃　〃	
57	8	〃	30.2	16.8	7.1	3.5	硬砂泥岩	〃	〃　〃	

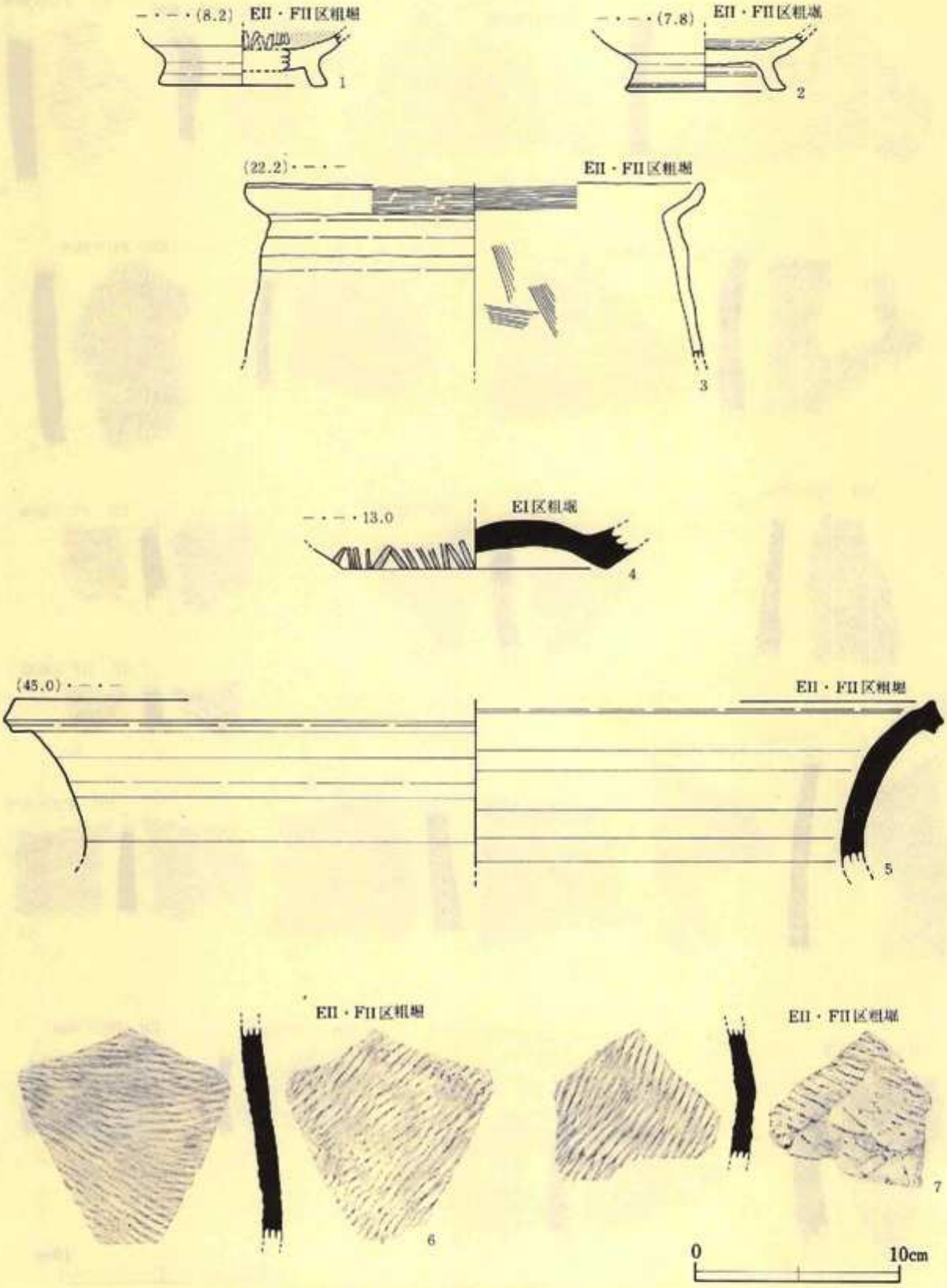
遺物図版



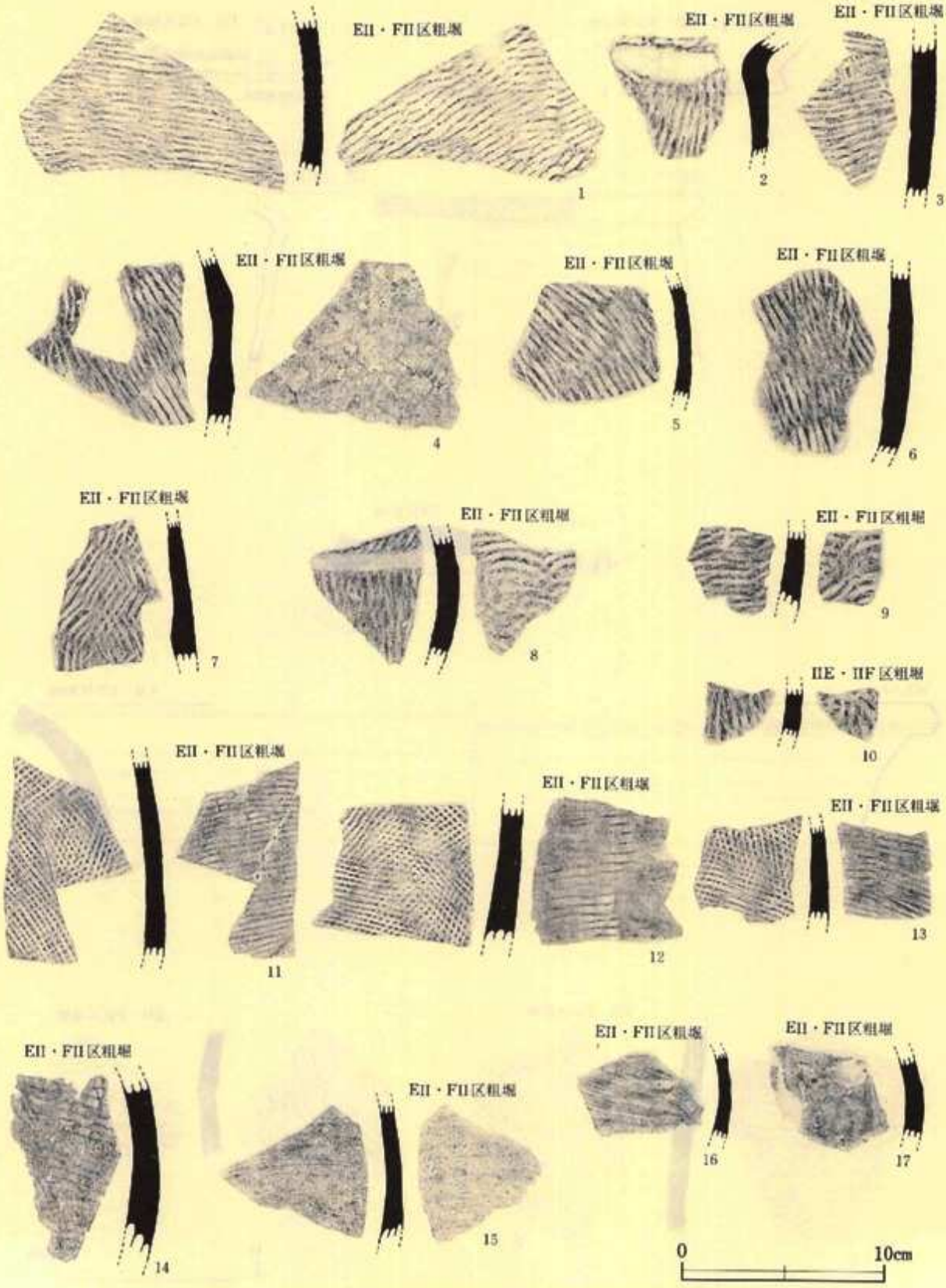
第12図　DIc5住居址・遺構外出土遺物（CIh5グリット）



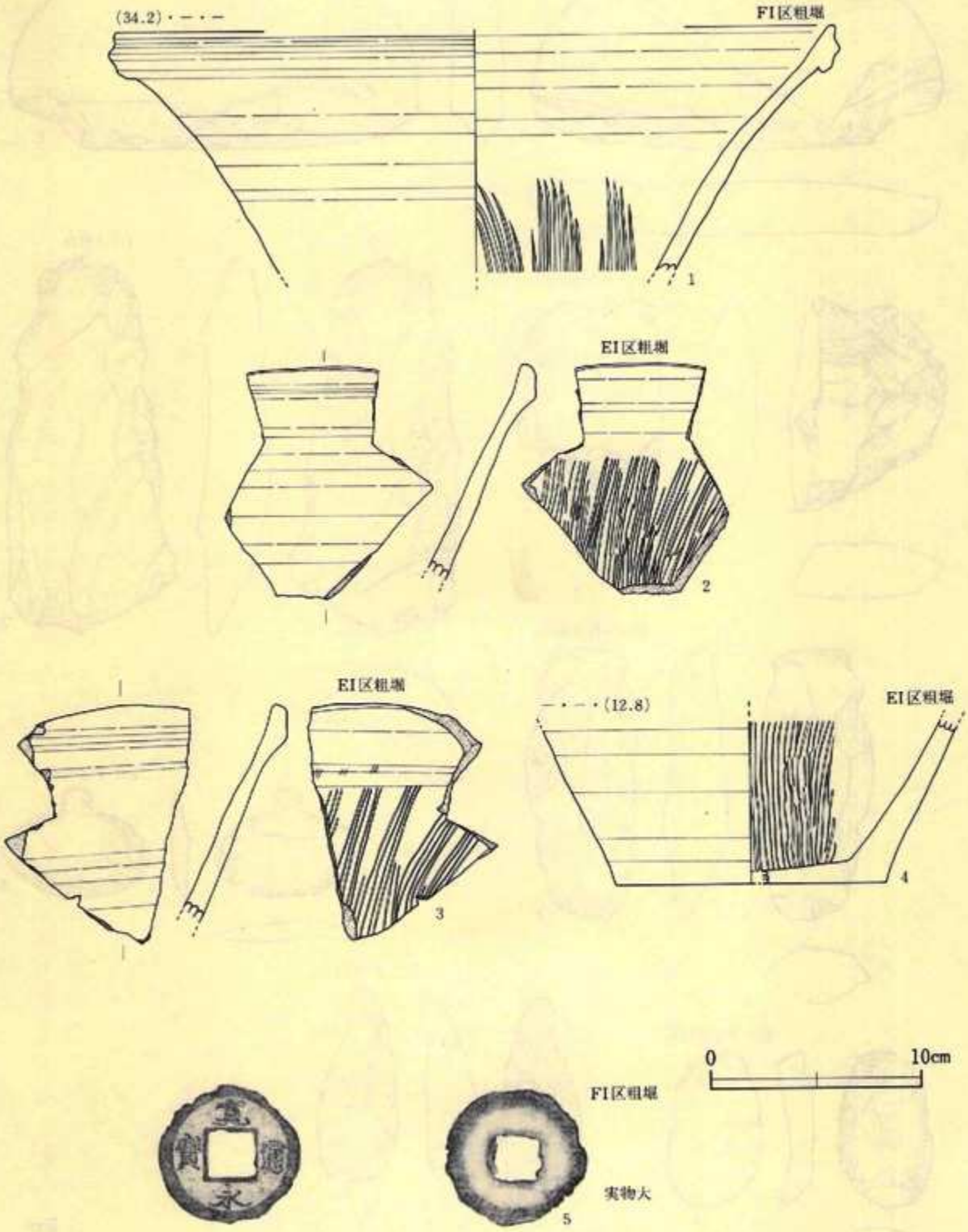
第13図　遺構外出土遺物（EII・FII区粗堀）



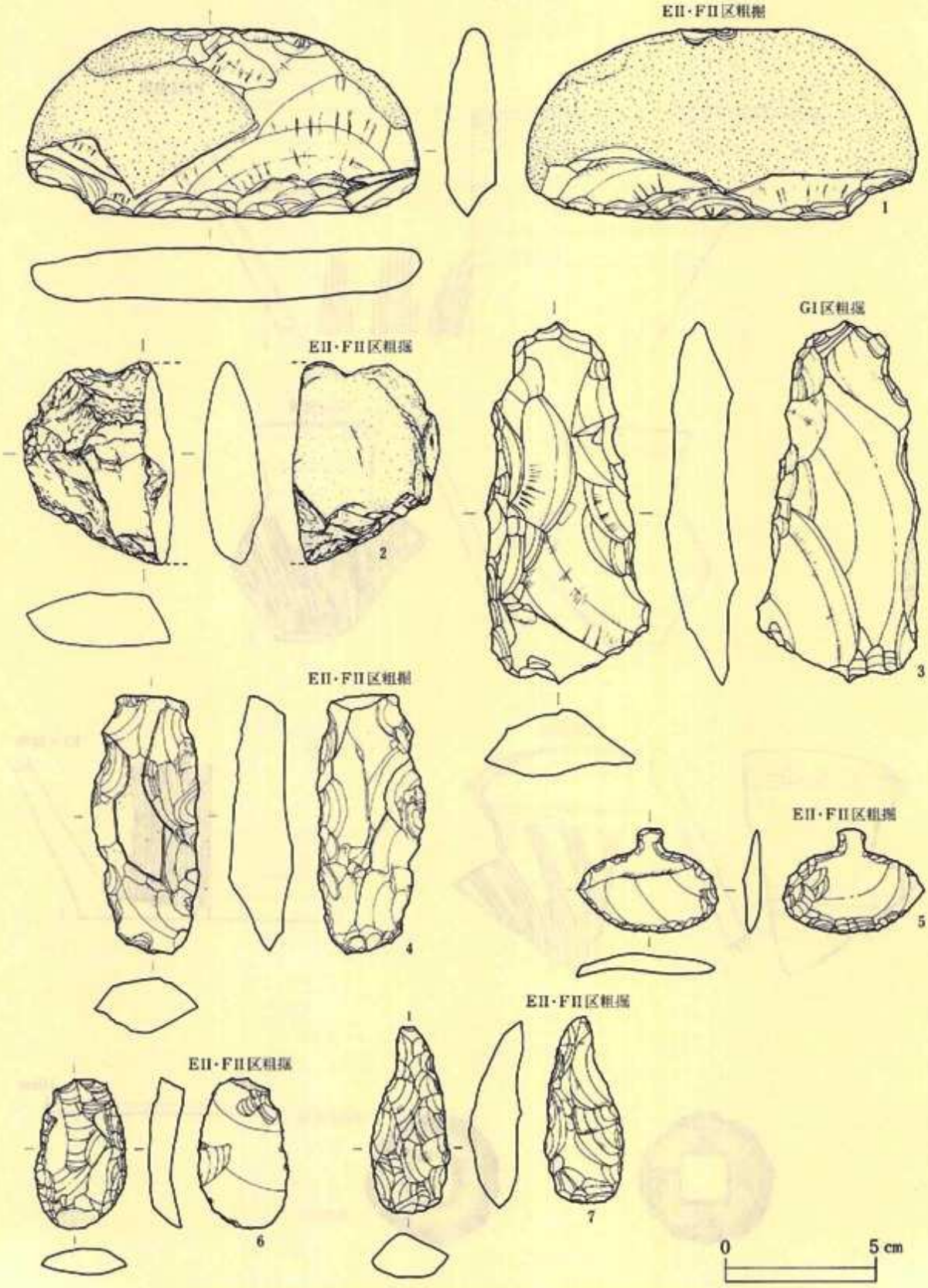
第14図　遺構外出土遺物（EI区粗堀、EII・FII区粗堀）



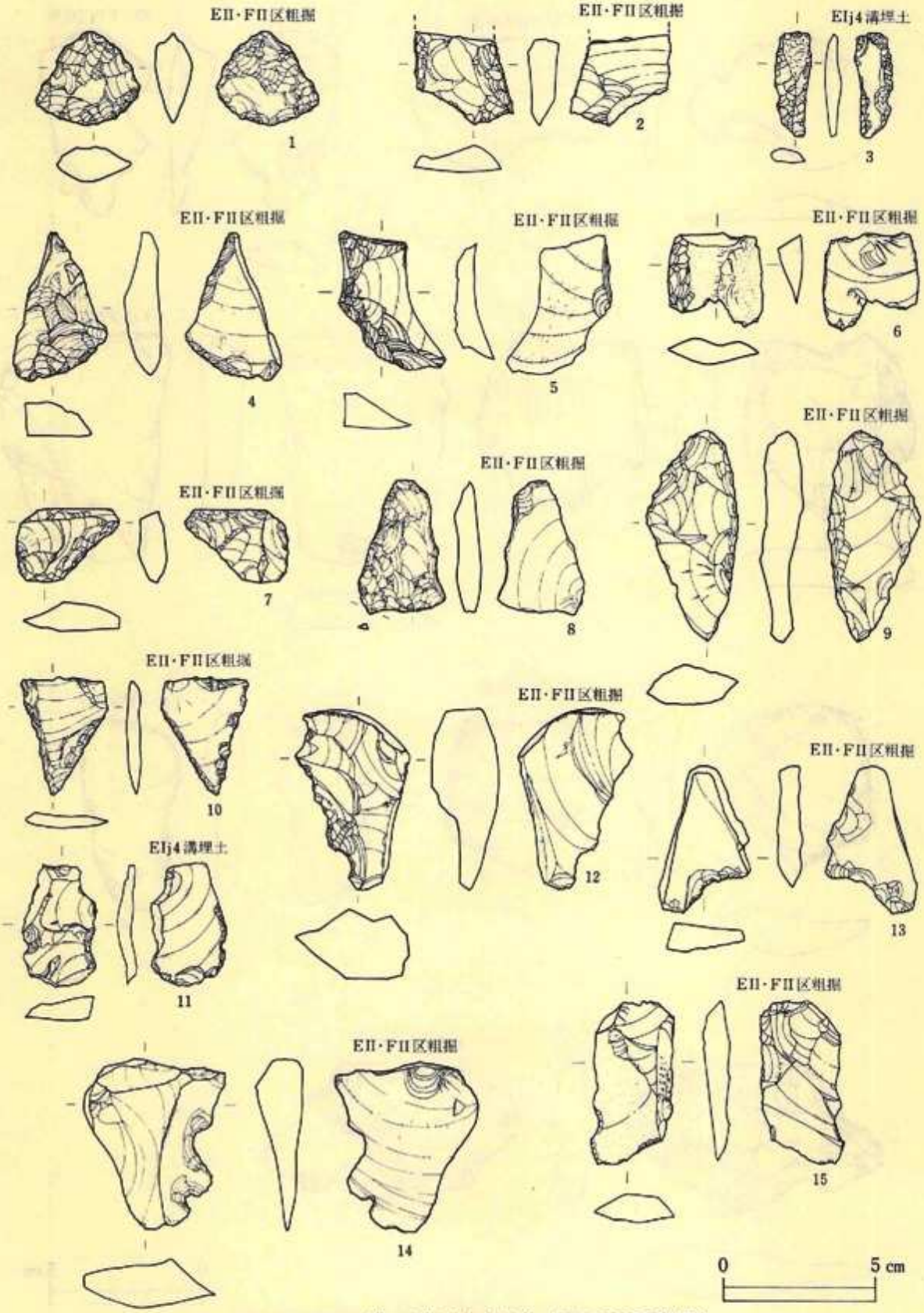
第15図　遺構外出土遺物（EII・FII区粗堀）



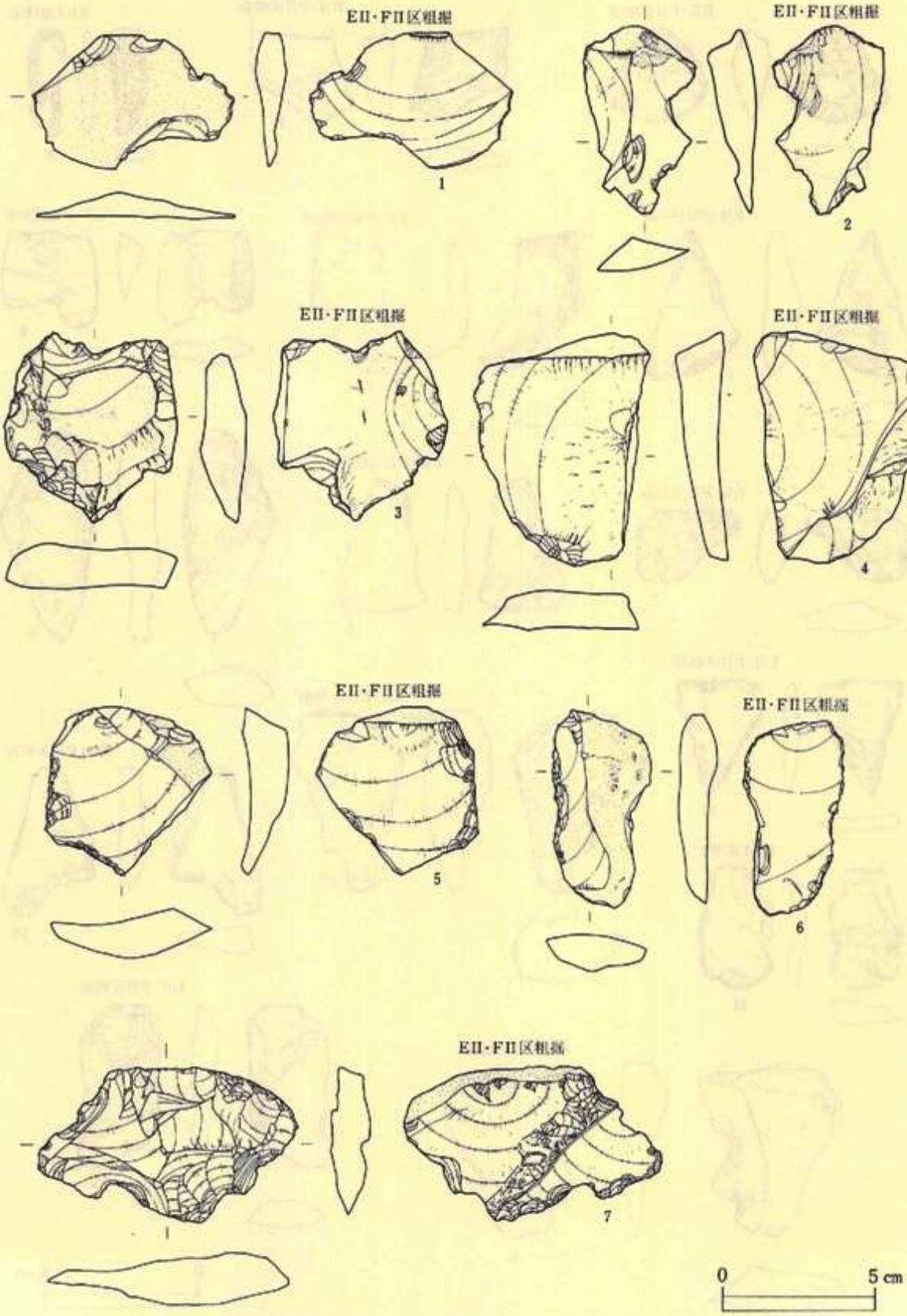
第16図　遺構外出土遺物（EI区粗堀、FI区粗堀）



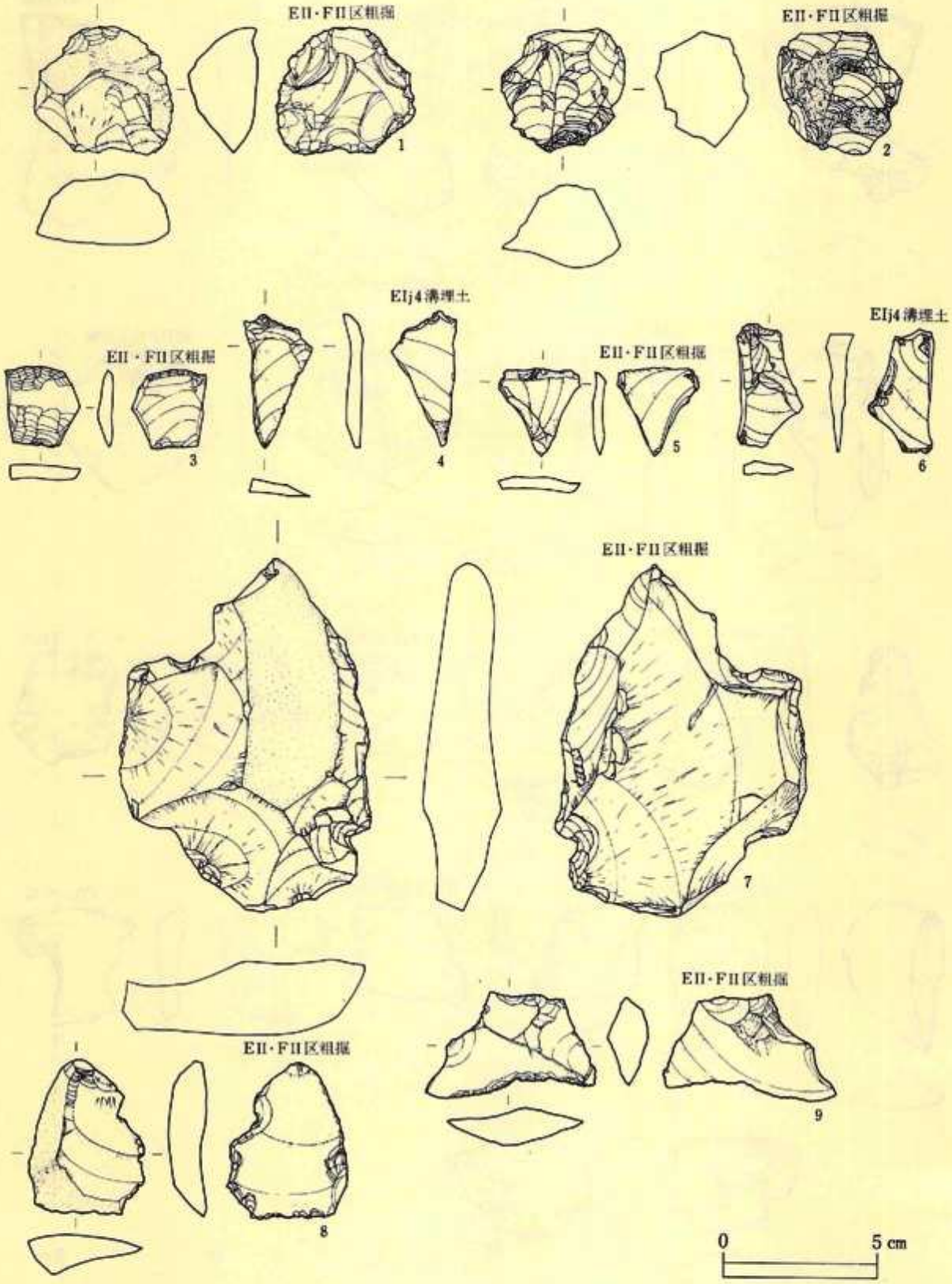
第17図　遺構外出土遺物（GI区粗掘，EII・FII区粗掘）



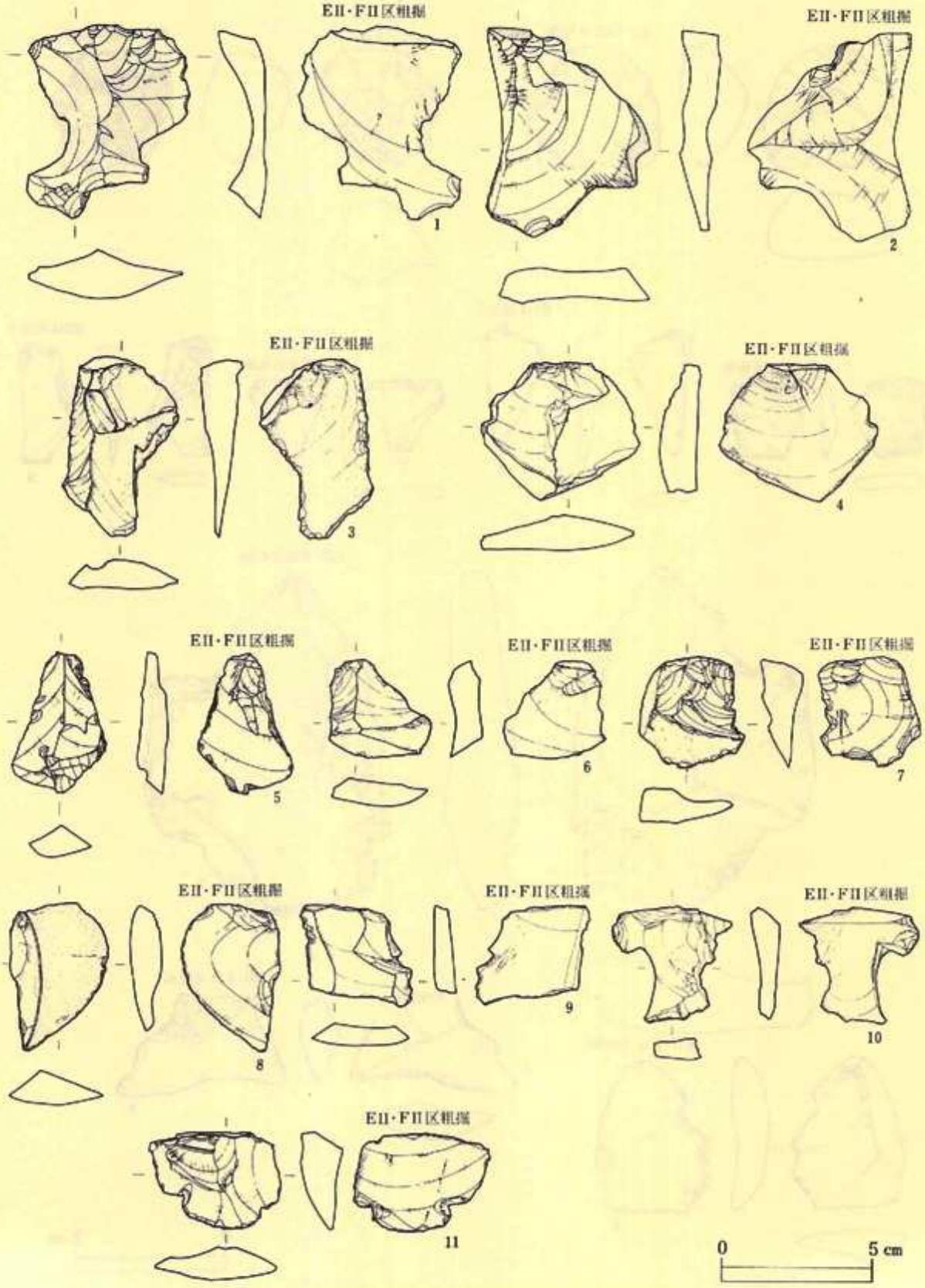
第18図　EIj4溝・遺構外出土遺物（EII・FII区粗掘）



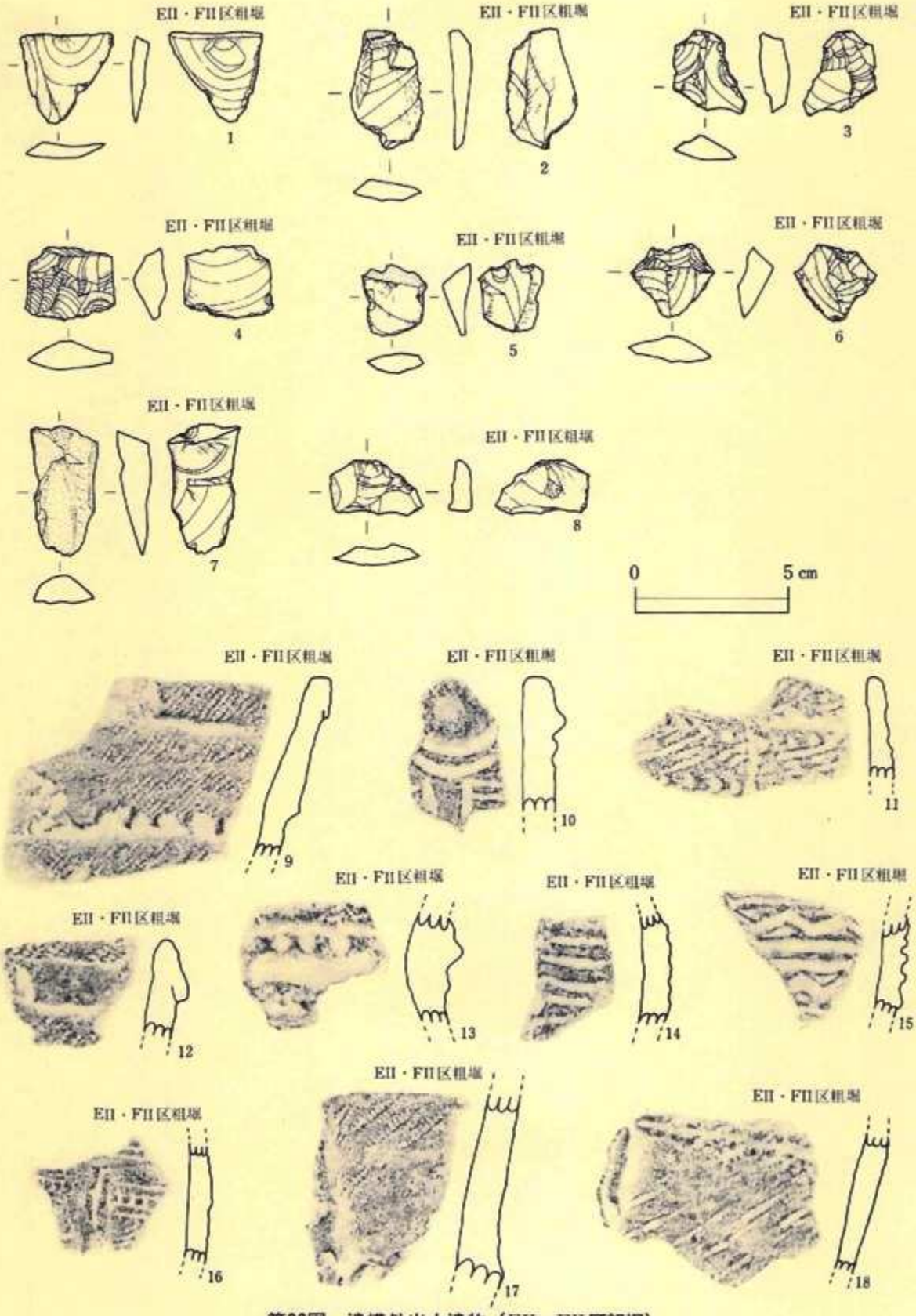
第19図　遺構外出土遺物（EII・FII区粗掘）



第20図　EIj4溝埋土・遺構外出遺物（EII・FII区粗掘）



第21図　遺構外出土遺物（EII・FII区粗掘）



第22図　遺構外出土遺物（EII・FII区粗堀）

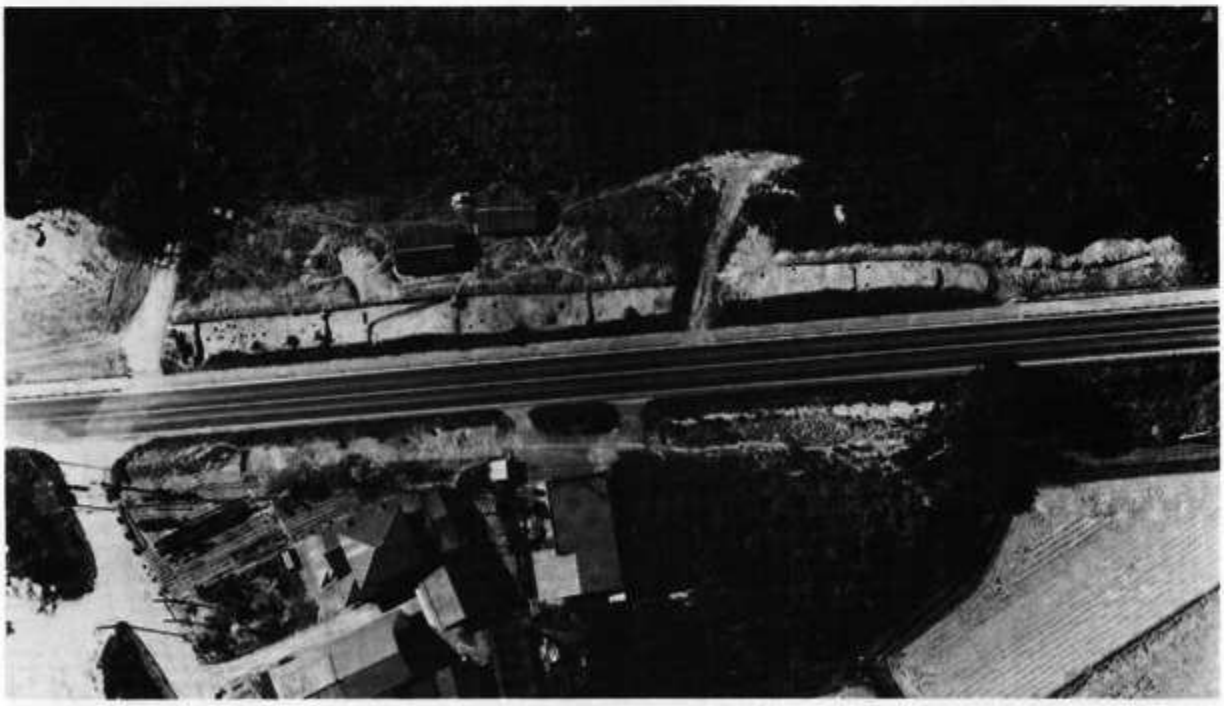
写真図版

上が南

上が北

写真図版１　小森林館全景（空中写真）

上が西



調査区域（上が西）

写真図版２　小森林館全景・調査区域全景（空中写真）

館北西堀・土塁（北から）

館北西堀・土塁（北東から）

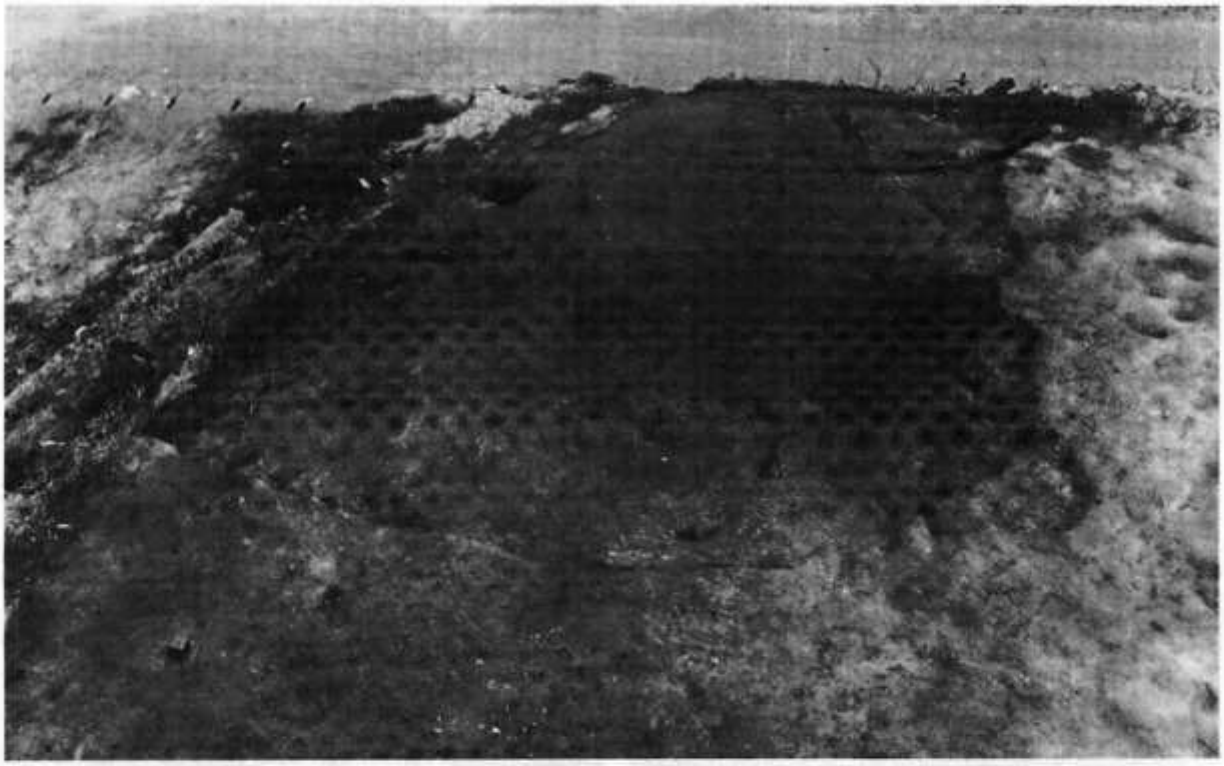
館西側堀北端（北から）

館西側堀中央付近（南東から）

北部北東部L字型堀・土塁（南から）

館南側沢（東から）

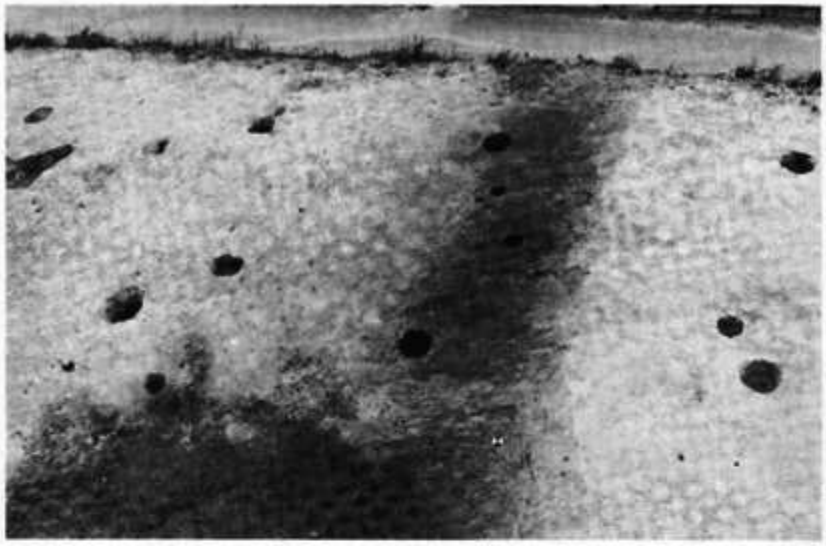
写真図版3　小森林館堀・土塁



全　景

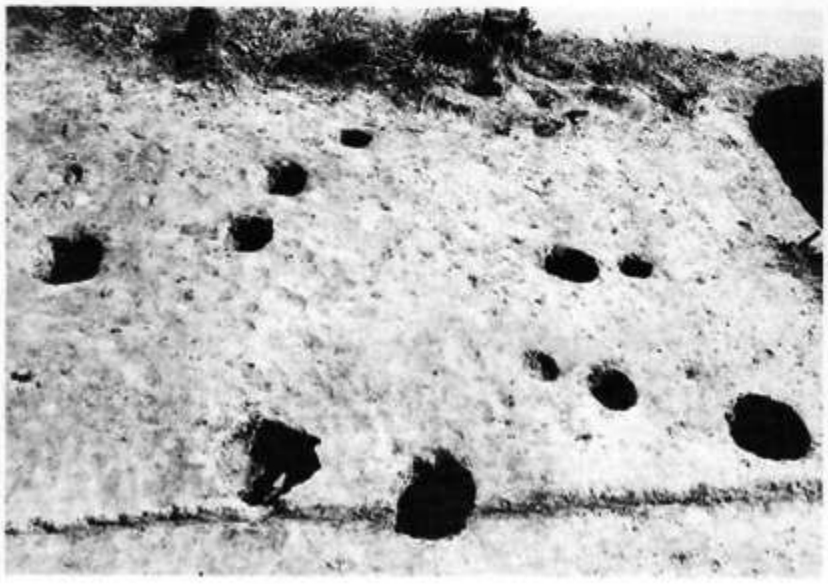
埋土断面

写真図版 4　DIc 5住居址



EIh5建物跡

GId4柱穴群（北部）



同　上（南部）

写真図版5　EIh5建物跡・GId4柱穴群

GI d4柱穴群（北西部）

同　上（南西部）

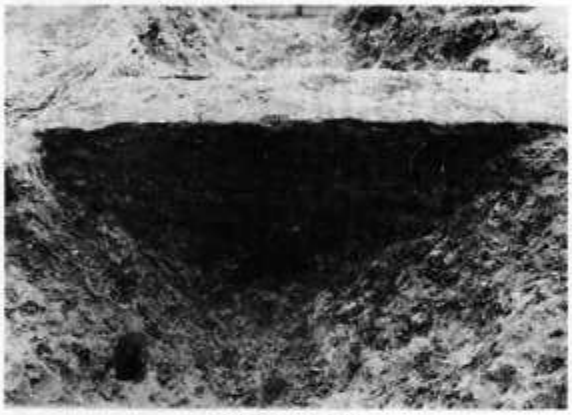
同　上（南から）

GId4柱穴群全景

写真図版6　GId4柱穴群

全　景（No.1）

全　景（No.2）



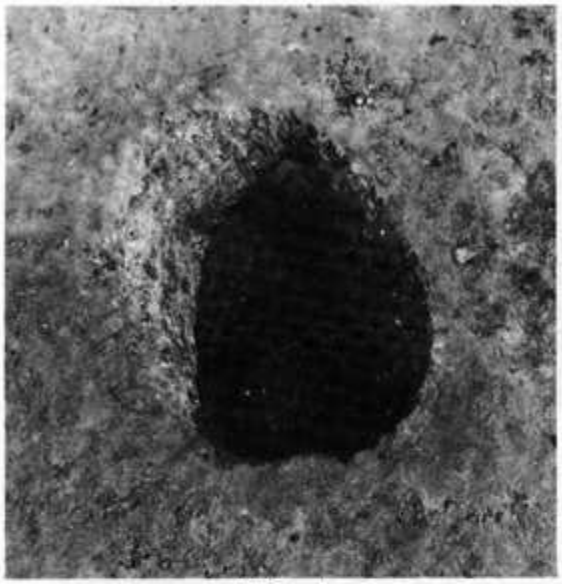
埋土断面（南部）

埋土断面（西部No.1）

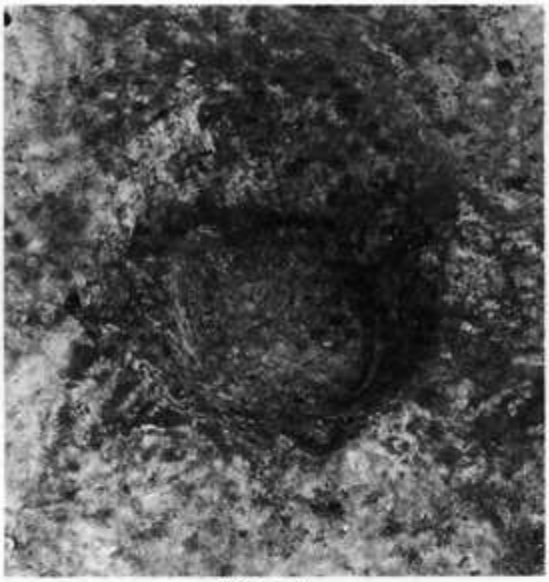
埋土断面（西部No.2）

埋土断面（北西隅）

写真図版7　EIj4溝

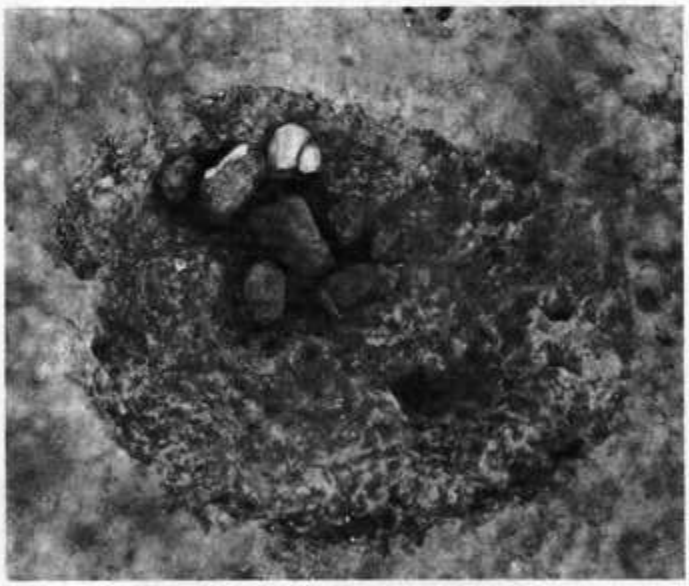


EIa5ピット



EIf4ピット

EIi4ピット



GIa5ピット

写真図版8　ピット

GIIライン（東西）断面

CI区土器出土地点

同上全景（沢北岸）

EII区付近

FI区深掘断面

FII区付近

写真図版 9　GI、FI、CI、EII、FII区状況

12－2

12－3

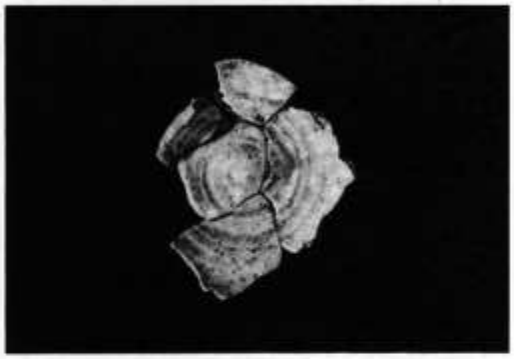
12－4

12－5

12－6

写真図版10　土器

12－7



12－8

12－9

13－1

13－5

13－10

13－3

13－11

13－4

13－7

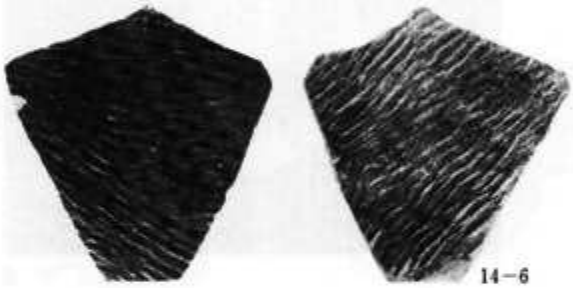
写真図版11　土器

14－1

14－2

14－3

14－5



14－6

14－7

15－1

15－2

15－3

15－4

15－5

15－6

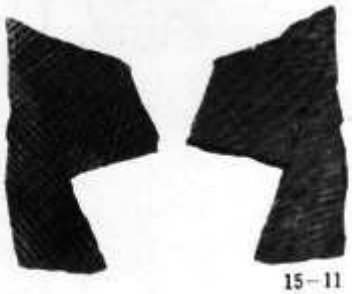
15－7

写真図版12　土器

15−8

15−9

15−10


15−11

15−12

15−13

15−14

15−15

15−16

16−1

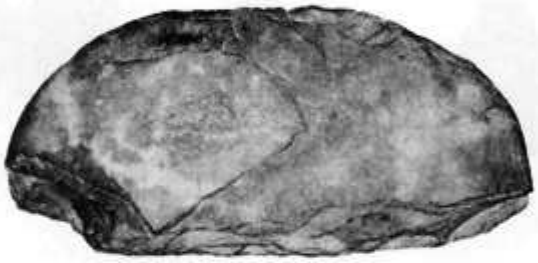
16−2

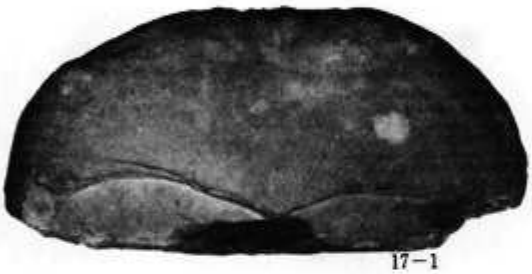
写真図版13　土器

16－3

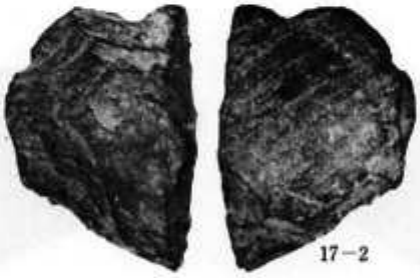
16－4

16－5





17－1

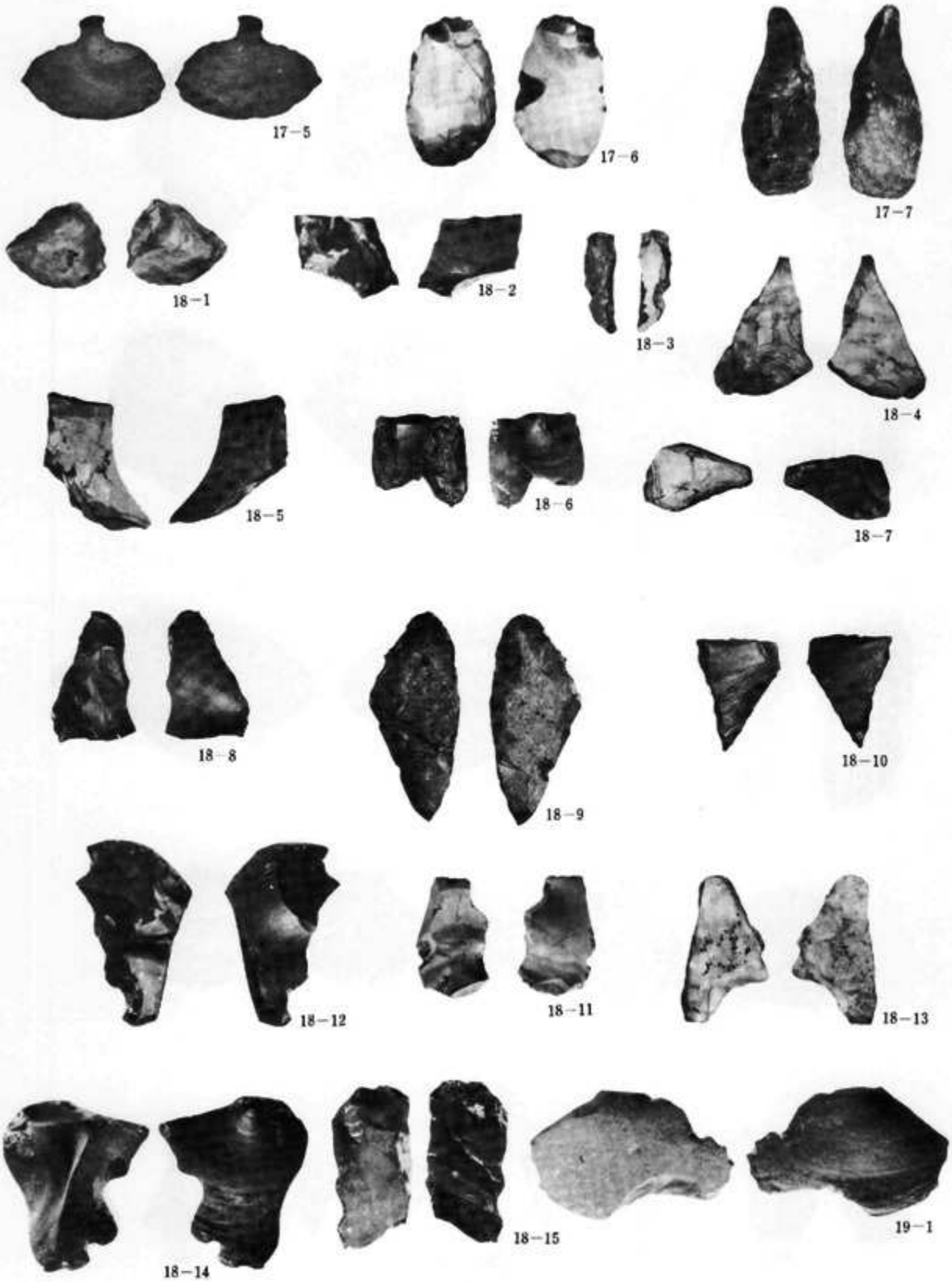


17－2

17－4

17－3

写真図版14　土器、石器

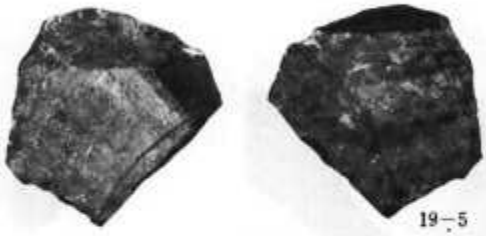

17−5
17−6
17−7
18−1
18−2
18−3
18−4
18−5
18−6
18−7
18−8
18−9
18−10
18−12
18−11
18−13
18−14
18−15
19−1

写真図版15　石器

19－2

19－3

19－4



19－5

19－6

19－7

20－1

20－2

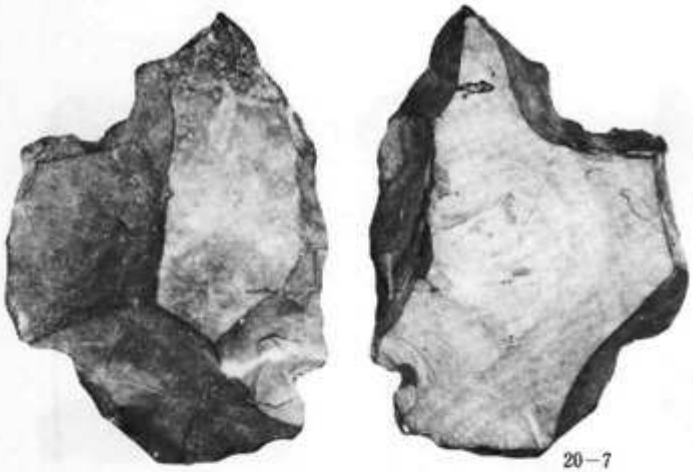
20－3

20－4

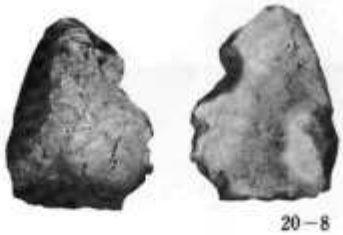
20－5

20－6

写真図版16



20－7



20－8

20－9

21－1

21－2

21－3

21－4

21－5

21－6

21－7

21－8

21－9

21－10

21－11

写真図版17

22－1

22－2

22－3

22－4

22－5

22－6

22－7

22－8

22－9

22－10

22－11

22－12

22－13

22－14

22－15

22－16

22－17

22－18

写真図版18

岩手県埋文センター文化財調査報告書第73集

小森林館跡発掘調査報告書

国道4号石鳥谷バイパス関連遺跡発掘調査

印刷　昭和59年1月20日

発行　昭和59年1月31日

発行　(財)岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡字高屋敷

TEL(0196)38－9001～2

印刷　川口印刷工業株式会社